

# 萩の原古墳群Ⅱ

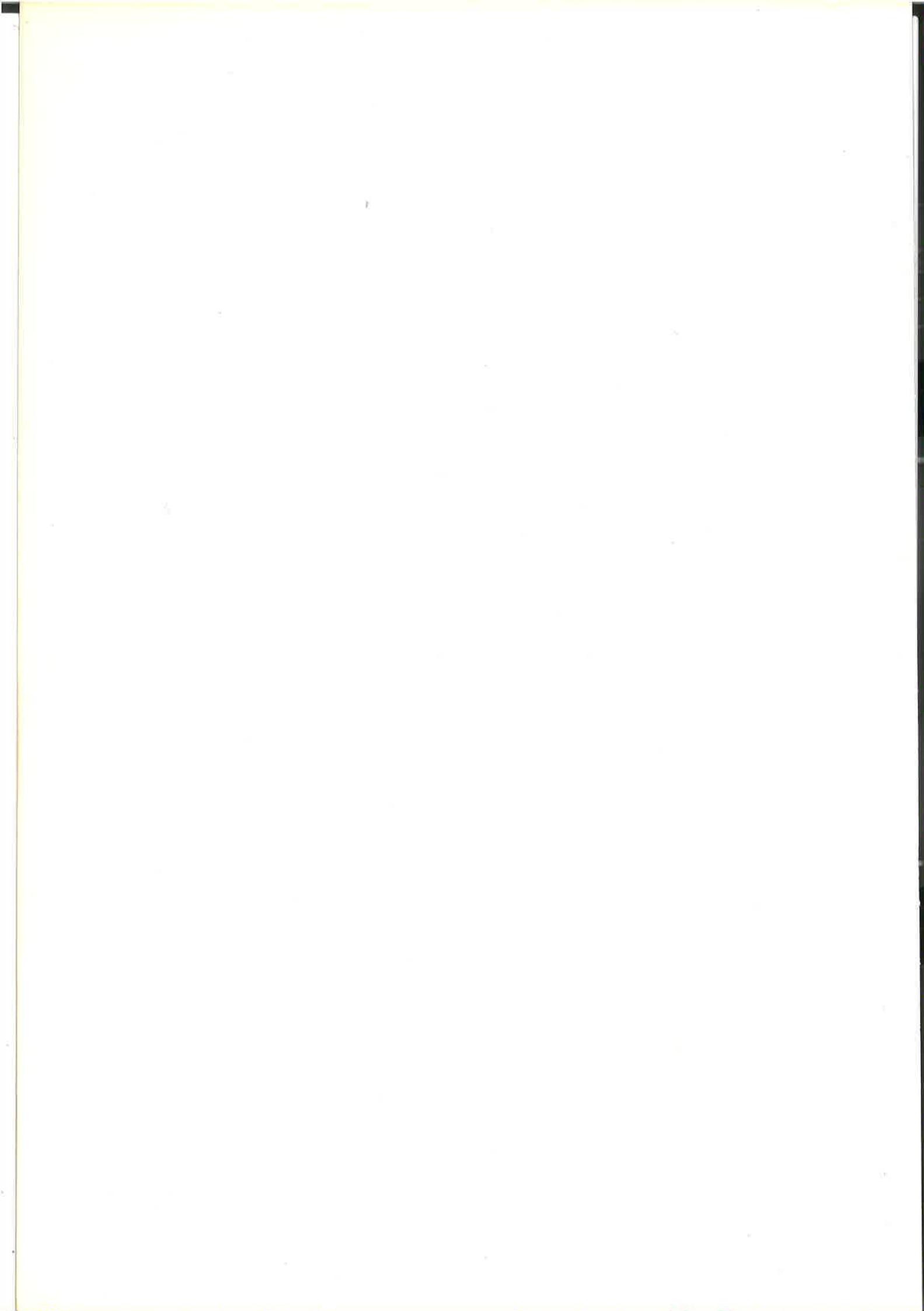
——福岡県糸島郡二丈町大字深江所在遺跡の調査——

## 二丈町文化財調査報告書

第 17 集

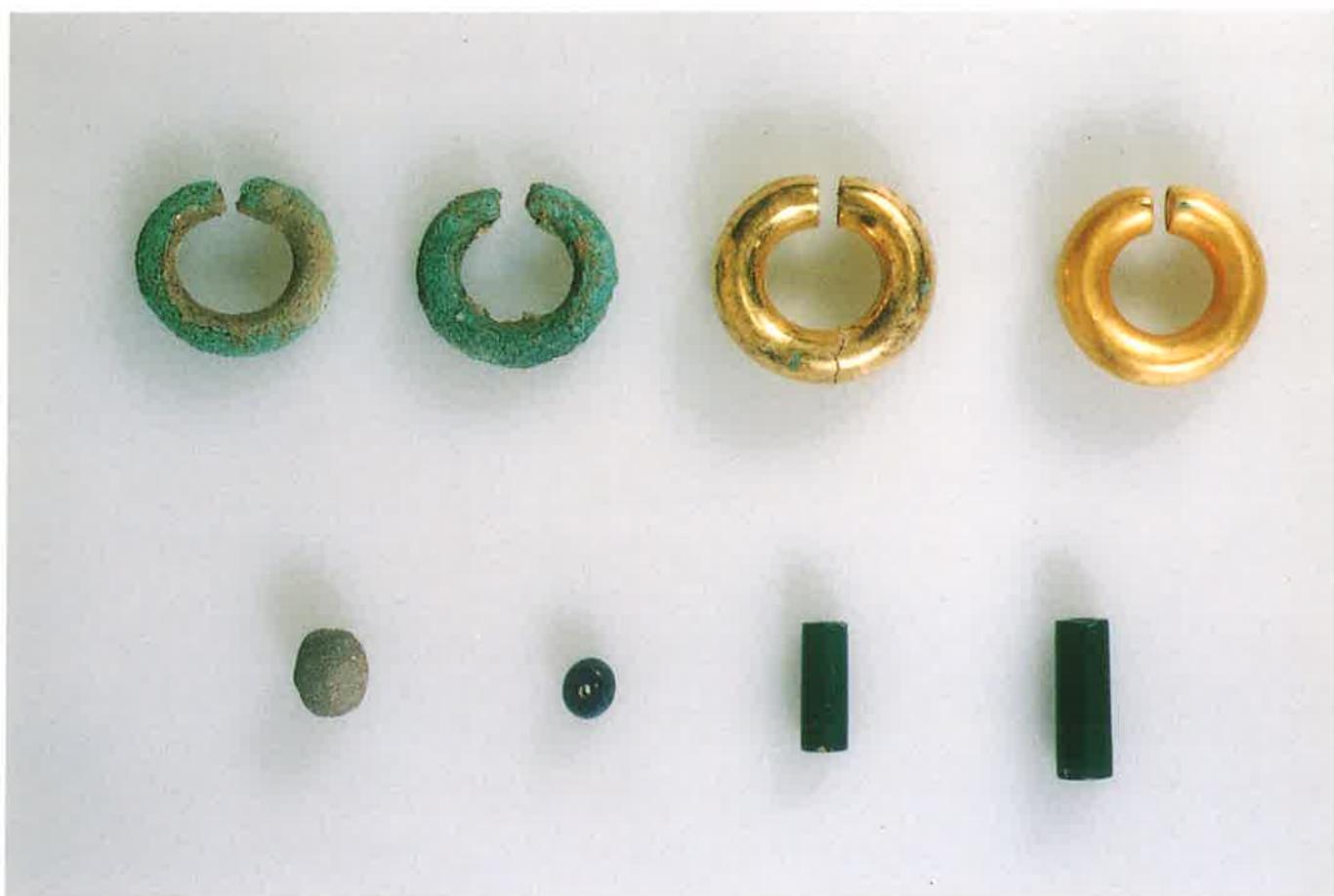
1997

二丈町教育委員会









7号墳出土装身具



## 序

この報告書は平成7年10月28日より翌年1月7日まで、二丈町教育委員会が二丈町大字深江に所在する古墳の発掘調査を行った記録です。

この地域一帯は、平成元年に特別養護老人ホーム「仙寿苑」が建設されたのをはじめ、平成4年から翌5年にかけて、西日本短期大学二丈キャンパスや、老人保険施設「ふる里」が建設されるなど、開発が進んでいるところでありますが、付近には以前より古墳群があることで知られており、平成元年にも老人ホームの建設に伴い、発掘調査を実施しました。

この度、この地域一帯の主要道路である町道淀川西線の舗装工事に伴い、現状保存していた古墳1基が、記録保存の形を取らざるを得なくなり、今回調査を行うことになりました。  
発掘調査・報告書作成にあたり、文化財に対して深い御理解・御協力をいただきました方々に、  
厚く感謝の意を表します。

平成9年3月31日

二丈町教育委員会

教育長 吉村昌幸

## 例 言

1. 本書は平成7年度に二丈町教育委員会が、町道舗装工事に伴い、町の単独費用にて平成7年10月28日より翌年1月7日まで実施した発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は二丈町教育委員会 津國 豊が担当した。
3. 遺構実測は古川秀幸、津國、山本繁が行い、遺構写真撮影は津國が行った。
4. 遺構全体写真は空中写真企画に委託した。
5. 遺物の実測・製図及び写真撮影は津國が行った。
6. 土器の整理・復元は木下文子、古藤紀子が行った。
7. 本書で用いる方位は磁北である。
8. 本書の執筆ならびに編集は津國が行った。

## 本 文 目 次

I. はじめに .....	1
1. 調査の経過 .....	1
2. 発掘調査の組織 .....	1
II. 遺跡の位置と環境 .....	2
III. 調査の記録 .....	6
1) 位置と現状 .....	6
2) 墳丘および周溝 .....	6
3) 主体部（石室） .....	6
4) 遺物出土状況 .....	10
5) 出土遺物 .....	10
IV. まとめ .....	22
V. おわりに .....	24

## 挿図目次

第1図	萩の原古墳群位置図 (1/25,000)	3
第2図	調査中の6号墳 [左] と5号墳現況 [右]	4
第3図	7号墳周辺地形図① (1/2,500)	5
第4図	7号墳周辺地形図② (1/1,000)	6
第5図	遺跡全体図 [完掘状況] (1/100)	7
第6図	7号墳主体部実測図 (1/40)	8
第7図	7号墳遺構土層図 (1/15)	9
第8図	7号墳掘り方断面図 (1/40)	9
第9図	7号墳遺物出土状況図 (1/80)	10
第10図	7号墳出土耳環実測図 (2/3)	10
第11図	7号墳出土玉類実測図 (1/1)	11
第12図	7号墳出土鉄器実測図 (1/2)	11
第13図	7号墳出土土器実測図 1 (1/3)	14
第14図	7号墳出土土器実測図 2 (1/3)	16
第15図	7号墳出土土器実測図 3 (1/4)	18
第16図	7号墳出土土器実測図 4 (1/3)	20
第17図	出土石器実測図 (2/3)	21

## 図版目次

巻頭図版 7号墳出土装身具

図版 1 萩の原古墳群全景 [一貴山・深江平野を望む] (南西から)

図版 2 (1) 7号墳全景 (南東から)  
(2) 同 (真上から)

図版 3 (1) 7号墳調査前現況 (東から)  
(2) 7号墳主体部付近 (北から)

図版 4 (1) 7号墳主体部付近 (東から)  
(2) 7号墳遺構土層堆積状況 (SD-01)  
(3) 同 (SX-01)

図版 5 7号墳遺物出土状況

図版 6 (1) 7号墳完掘状況 (東から)  
(2) 同 (北から)

図版 7 7号墳出土遺物 I

図版 8 7号墳出土遺物 II

図版 9 7号墳出土遺物 III

図版 10 7号墳出土遺物 IV

# I. はじめに

## 1. 調査の経過

萩の原古墳群のある深江地区は古くから交通の要衝として開発・発展のあった地域である。古墳時代においてもそれは例外ではなく、一貴山・深江平野を囲む丘陵部には、数多くの古墳が点在する。著名な一貴山銚子塚古墳や徳正寺山古墳・波呂二塚古墳などの前方後円墳、後期においては萩の原古墳群や松末・唐船古墳群等の群集墳が、その時代における付近一帯の繁栄を示している。

当該発掘の端緒は、二丈町大字深江の西側丘陵にある西日本短期大学二丈キャンパス構内における町道舗装工事計画である。

この淀川西線には、平成3年の建設の際に行った試掘調査において、道路の真下に当たる部分に、かなり破壊が進行しているものの、古墳が存在することが確認されていたが、未舗装の道路に客土することにより、現状保存の形をとってきた。しかし、この度の舗装工事に伴ってやむなく発掘調査を行い、記録保存することとなった。

発掘調査は、平成7年10月28日より翌年1月7日の間に、二丈町教育委員会が主体となって実施した。

## 2. 発掘調査の組織

調査主体	二丈町教育委員会		
総 括	教 育 長	吉 村 昌 幸	
	教 育 課 課 長	空 閑 俊 明	
	同 課長補佐	清 水 泰 次	
庶 務	社会教育係 係 長	瀬 戸 利 三	
調 査	社会教育係 主 事	津 國 豊	
調査・整理作業	阿部恵美子、瀬戸信樹、瀬戸庸子、山崎幸子、 山本 繁、 吉村新一		
遺物復元作業	木下文子、古藤紀子		
重機オペレーター	(有) 田中組 専務	田中 正人	

なお、調査にあたっては、同職の古川秀幸主事、村上 敦主事に有益な助言をいただいた。  
また、西日本短期大学・老人保健施設「ふる里」関係各位には、通行道路の封鎖・迂回路の使用等、御理解と御協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げる次第です。

## II. 遺跡の位置と環境

萩の原古墳群のある深江地区は、古くから交通の要衝として開発・発展のあった地域である。

深江地区は、その名の示す通り、昔はかなり海岸線が複雑に入り込んだ入り江となっていたようである。そのため、遺跡も山裾に集中する傾向があると見られてきた。稲作開始の遺跡として有名な「石崎・曲り田遺跡」は、隣接する一貴山地区の独立した丘陵上に位置しており、周辺の丘陵およびその裾部には、数多くの遺跡が存在する。

近年、弥生時代中期の甕棺墓を出土した木舟・三本松遺跡や、中期末～終末期の井牟田遺跡、平安時代から中世にかけての遺跡である木舟の森遺跡など、平野部においても遺跡の集中した地区であることが判明し、一帯が平野・丘陵部を問わず、弥生時代以降、大陸文化伝播の要衝としての性格を後世まで持っていた地区であると言つてよい。

古墳時代においても、一貴山・深江平野を囲む丘陵部には、数多くの古墳が点在する。舶載鏡を含む10面もの鏡が出土した著名な前期古墳である一貴山・銚子塚古墳を始め、徳正寺山古墳・波呂二塚古墳などの前方後円墳があり、後期においては、萩の原古墳群や松末・唐船古墳群を始めとする群集墳が、その時代における付近一帯の繁栄を示している。

また、平野部においても、萩の原古墳群から東北東におおよそ1kmの地点に位置する塙田遺跡において、3基の古墳が福岡県教育委員会により確認・調査されている。この古墳は、平野部の砂地上に築かれた、極めて特異なもので、小規模な石棺状の竪穴式石室ともいべき主体部を有し、古式の様相を呈しながらも、周溝から出土した須恵器により6世紀後半代に位置付けられていた。そして、付近の丘陵地には萩の原古墳群を始め、同時期の横穴式石室を持つ多くの古墳があり、近接して古墳を築造するのに条件のよい丘陵が存在するにもかかわらず、何故あえて柔らかい砂地を補強してまで、前述のような主体部を有する古墳を築いたのかという問題は、被葬者集団の性格等を考察する上で重要であり、このような類例の増加が期待される所であったが、平成8年から、塙田遺跡の南側で行われている「塙田南遺跡」から、同様の様式を呈する古墳が新たに調査され、周溝に埋納された土師器小壺から同古墳が4世紀末～5世紀初頭に位置づけられることが明らかになっている。

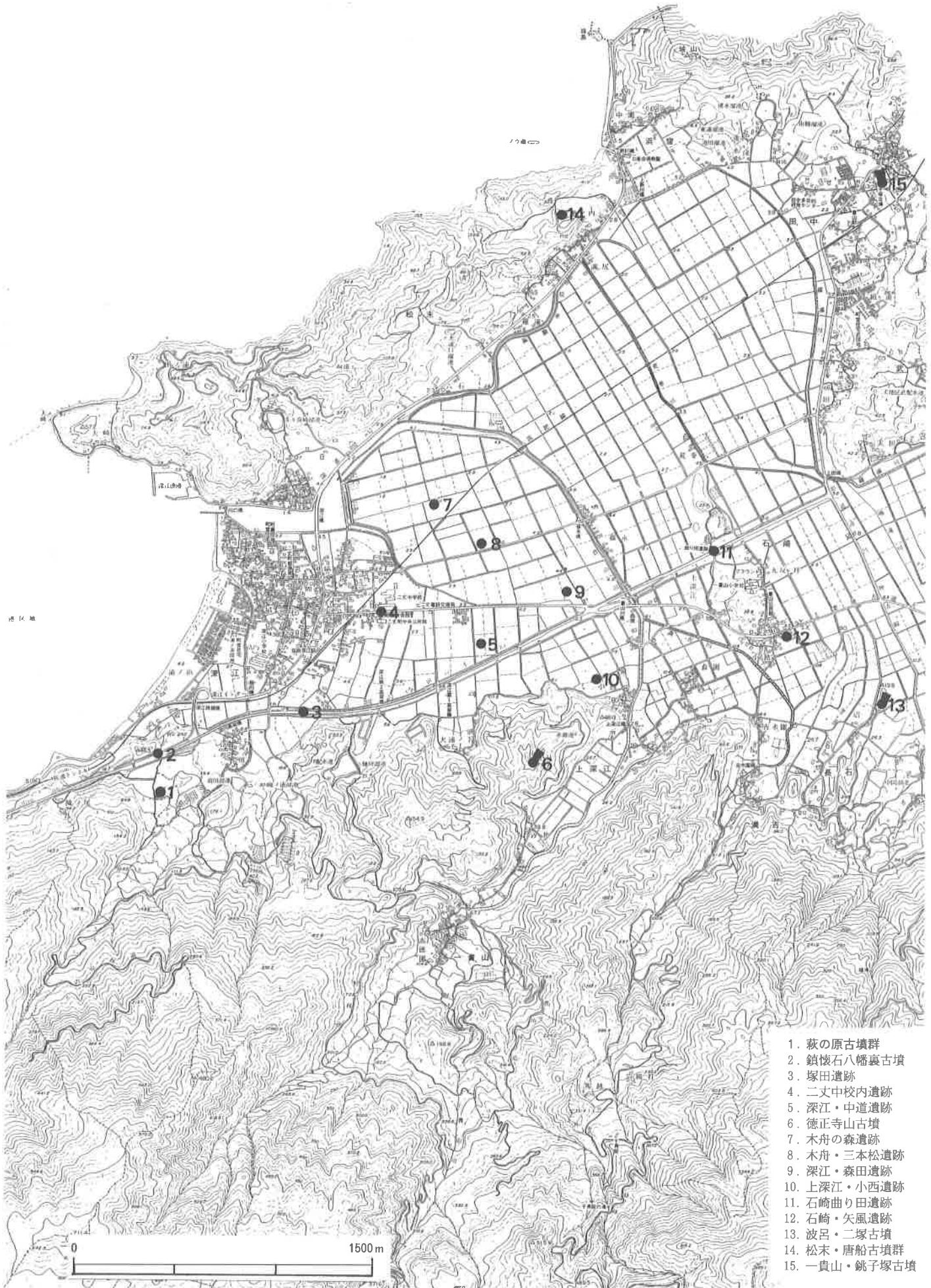
今回調査した古墳は、二丈町大字深江字萩の原の西日本短期大学二丈キャンパス構内を東西に走る町道淀川西線の直下に位置する。

立地は、眼下に深江の浜、玄海灘を望む脊振山系の二丈岳（標高711.4m）より派生する丘陵上であるが、この丘陵には以前より古墳があることが知られており、昭和54年にも、初期須恵器を伴う古墳（縦穴系横口式石室を有する）が、県文化課によって調査されており、他にも古式の古墳が存在する可能性を秘めている。

また、丘陵先端部には、「子負ヶ原」と呼ばれ、九州最古といわれる万葉歌碑のある鎮懐石八幡宮が、人々の信仰を集めている。

萩の原古墳群のある丘陵一帯の山田並びに柑橘畠（現在西日本短期大学演習造園地）に点在する横穴式古墳は、古くから墳丘の大部分が破壊され、石室が露出していたためか、昔は鬼倉と言い伝えられており、古墳というより昔の住居跡と考えられてきたようである。このため、後代の人々は鬼倉（開口した横穴式石室）を利用して、農作物の収納や農具の保管場所にしてきたとの記述も残されている。

同古墳群は、今回調査を行った古墳を除いてこれ迄に6基が確認されているが、その内2基を平



第1図 萩の原古墳群遺跡位置図 (1/25,000)

成元年、二丈町教育委員会が調査し、6世紀後半代の様相を示す横穴式石室と出土遺物が確認されている。今回調査を行った古墳も、立地・時期共に当古墳群の1基として位置付けることが出来ると考えられる。

古墳の現状は道路で、未舗装の道路町道淀川西線の直下に位置し、周辺は全て西日本短期大学造園学部の施設が占める。以前は斜面を利用した階段状の水田であり、古墳はその頃からたび重なる破壊にあっていたと推定される。その為、遺構の依存状況は極めて悪い。

#### 平成元年の調査の概要（第2図）

萩の原古墳群は、昭和63年に出された特別養護老人ホーム（「仙寿苑」）の建設計画に伴い、平成元年に2基を町教育委員会が調査し、（5号、6号墳）6号古墳からは、須恵器の他に、馬具・装身具・鉄刀等が出土しており、それらの遺物と横穴式石室の様相から、6世紀後半代に造営された古墳であろうと考えられている。

尚、6号墳の周辺や、天井石覆土から、近世陶磁器・寛永通宝が出土しており、江戸期に入ってからこの地域一帯の地形に、開墾等の大幅な手が加えられた可能性が指摘されている。

現在、6号墳は、老人ホーム横の5号墳に隣接して復元されている。

萩の原古墳群は前述のように今回調査を行った古墳を除いて、これまでに6基が確認されているが、今回調査を行った古墳を7号墳と位置付けることとする。

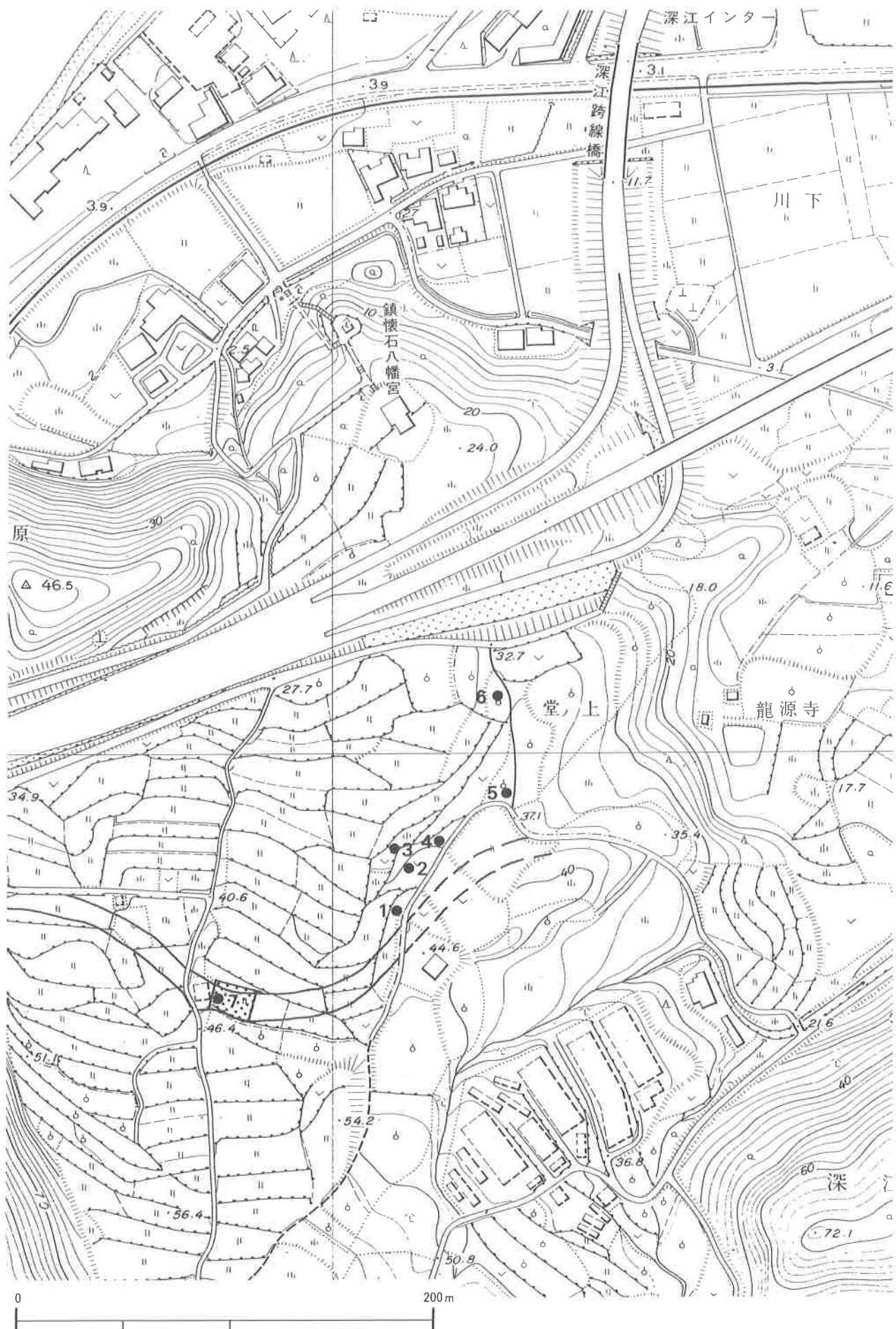
この7号墳は、5号墳からおおよそ200m南西にあり、約8m高位に位置する。



第2図 調査中の6号墳 [左] と5号墳現況 [右] (左に隣接するのは復元された6号墳)

#### ※参考文献

- ・福岡県教育委員会『鎮懐石八幡裏古墳』「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」第7集
- ・福岡県教育委員会『塚田遺跡』「同上」
- ・福岡県教育委員会『石崎曲り田遺跡 I～III』「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」第8～10集
- ・二丈町教育委員会『萩の原古墳群』「二丈町文化財調査報告書」第3集
- ・二丈の民話伝説発行委員会『二丈よもやま話』
- ・二丈町誌編纂委員会『二丈町誌』



第3図 7号墳周辺地形図① (1/2,500)

### III. 調査の記録

#### 1. 位置と現状（第3, 4図）

北東にのびる丘陵の北側斜面に立地しており、標高は約45mで現在確認されている範囲においては古墳群中の南西端で最も高位にあって、他の6基とはやや離れた地点に位置する。現状は道路で、それ以前は水田として利用されていた所もあり、北側斜面は段丘状に削平され、東側もやや急な斜面を形成している。段丘状に削平された北側は、道路建設の際に客土され、西日本短期大学の実習用地として利用されている。

古墳は、削平・破壊が著しく、墳丘は全く認められず、客土した盛土の直下に横穴式石室の石材と考えられる花崗岩の大石が確認できるに過ぎない。それらも古墳築造当時の原位置に留まると考えられるものは、ほとんど皆無であったが、掘り方や石の配列の状況から石室の腰石と考えられる3つの花崗岩の大石を確認した。

これらの腰石は、いずれも原位置から北側に向かって倒壊していると考えられる。

遺跡は地山・盛土共に自然石が極めて多く、古墳に使用されていた石材との判別が困難な状態であった。

#### 2. 墳丘および周溝（第5図）

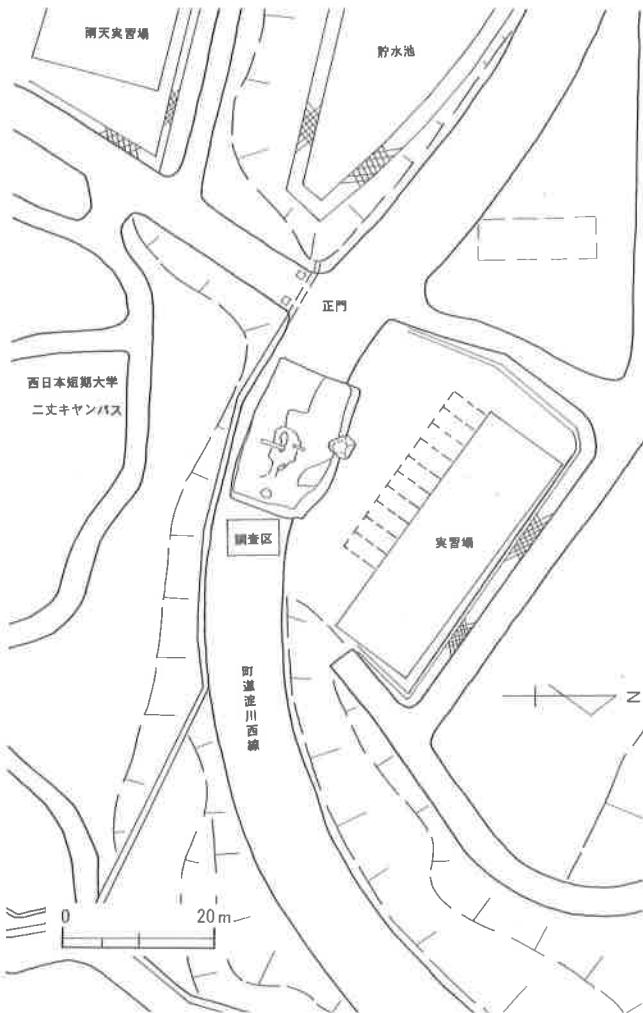
前述のように、墳丘は開墾等により削平を受け、全く現存していない。

掘り方は、丘陵の斜面の傾斜が緩やかなテラス状の地形を利用して、傾斜変換線に沿う形で掘り込まれている。南側は深さ約40cmで明瞭に確認できるが、斜面の下側に当たる北側は、完掘後わずかに段差が認められたのみであり、全長約4.7m、幅約3.3mを測る。

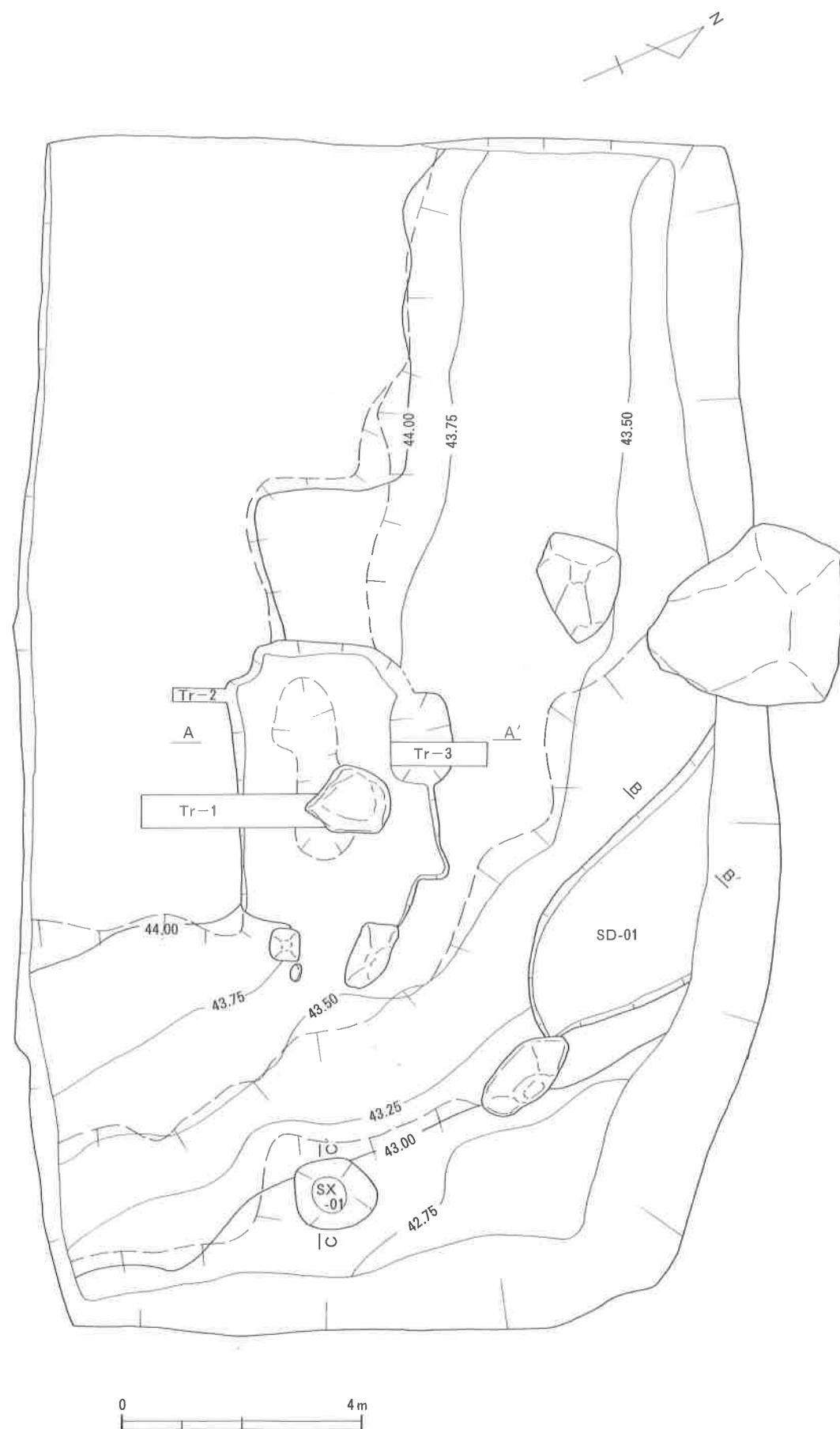
周溝は、北側のみで確認された。幅2m～3m、深さは20cm弱で削平のためかなり浅い。馬蹄形をなすと考えられるが、先端部のみの確認で、以下は調査区外に当たるため、充分な調査が行えず詳細は不明である。従って、ここでは溝状遺構（SD-01）と記しておく。この遺構から須恵器の破片が多量に出土した。この他、東側で土壙状の遺構（SX-01）を検出した。出土遺物は皆無であり、性格は不明である。

#### 3. 主体部（石室）（第6図）

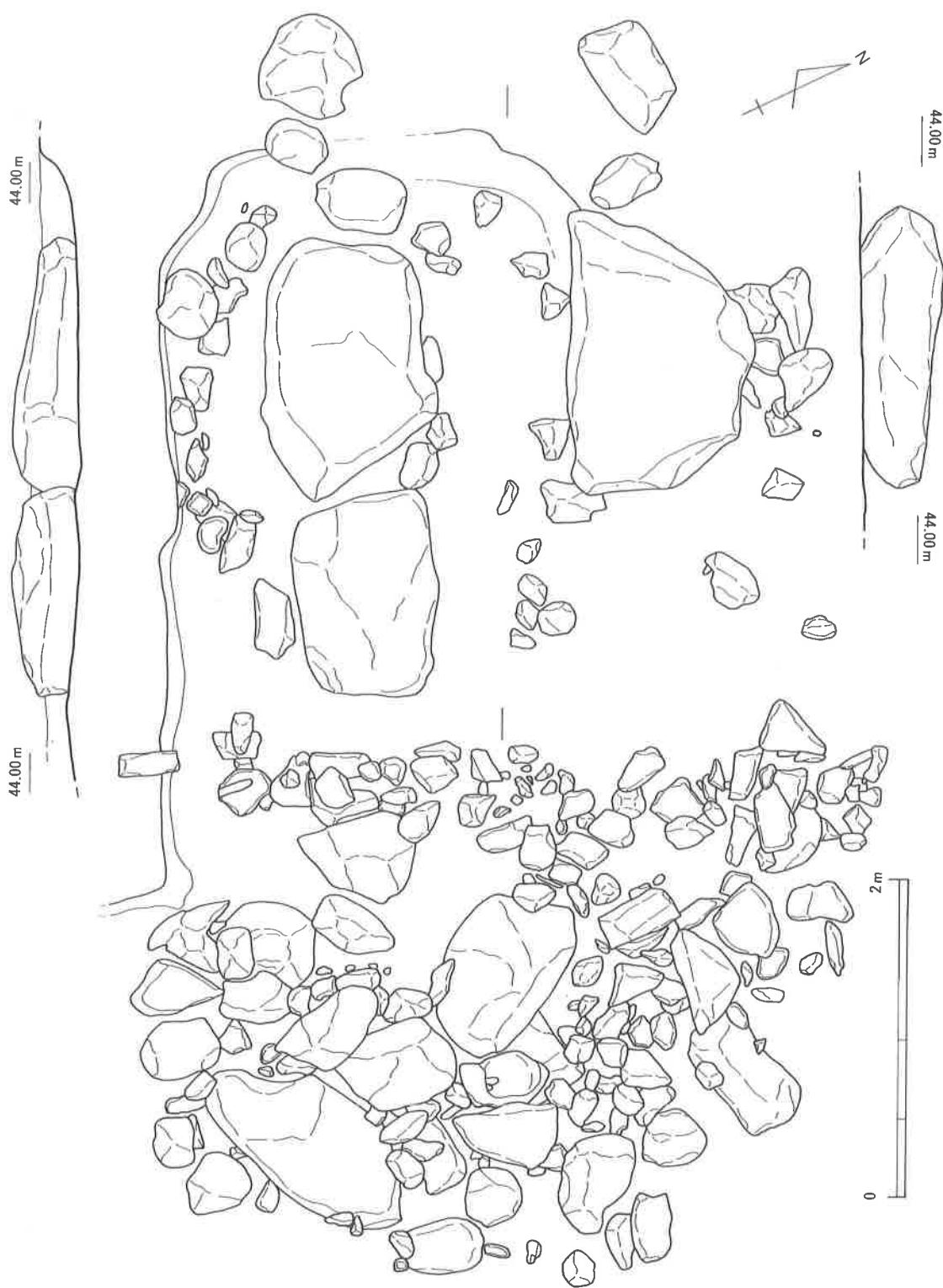
石室は破壊が著しく詳細は不明であるが、掘り方と併せて推定すると、主軸はN-66-Wで東南東方向に開口しており、单室で石材はほとんどが花崗岩であったと考えらる。規模を復元すると、大体奥行約2.5m、幅約2m前後である。腰石は、畳一畳前後の大石が左側壁に2個、右側壁に1個倒壊した状態で残存しており、いずれも横位に立てて使用していたと考えられるが、奥壁に大石を使用していた形跡は認められない。南側壁（左側壁）には、握り拳大～人頭大の石を裏込めとして使



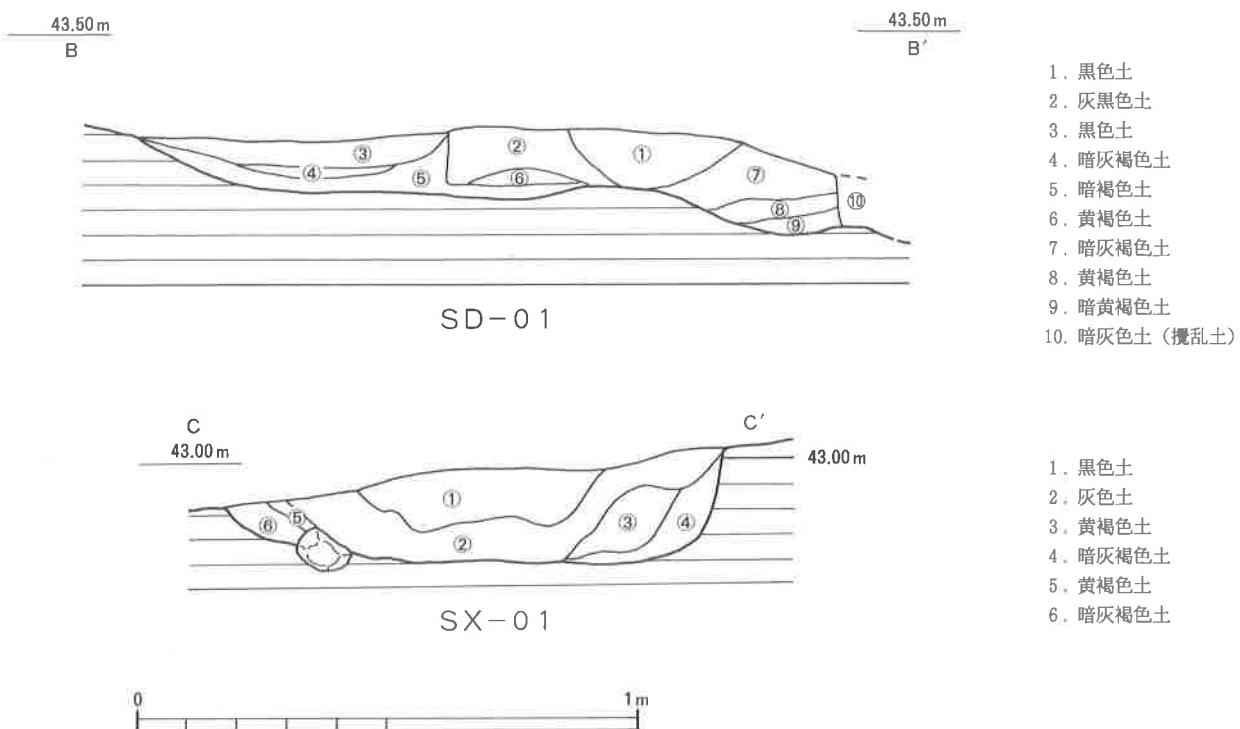
第4図 7号墳周辺地形図② (1/1,000)



第5図 遺跡全体図〔完掘状況〕(1/100)



第6図 7号墳主体部実測図 (1/40)

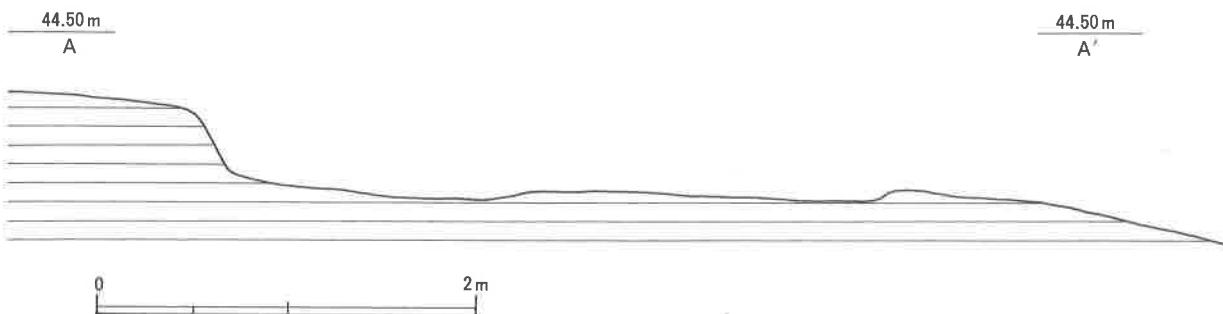


第7図 7号墳遺構土層図 (1/15)

用していた形跡が認められる。東側の斜面から、大小の石が多数敷石状に散らばっているのを検出し、古墳の石材も混入しているとも考えられたが、判別は不可能であった。

墳丘の裾部が残存する可能性を考慮して、小トレンチを設定し、併せて地山の確認を行った。その結果、墳丘は完全に消滅していて確認できず、客土していたと考えられる攢乱土層下に、古墳が破壊された際のものと考えられる。やや攢乱を受けた黒色の包含層が存在し、その下はすぐ地山であって、その地山にも、多くの自然石が存在する。

掘り方は、南側と比較すると、北側は僅かな段差を確認しうる程度であるが、これは削平を受けていることの他に、北側に向かって傾斜した地形も要因となっていることが考えられるであろう。(第8図)



第8図 7号墳掘り方断面図 (1/40)

#### 4. 遺物出土状況（第9図）

遺物は、古墳の破壊の状況から考えると、豊富に出土した。そのほとんどは主体部から東側で検出されており、主体部床面からは、玉類・刀子などが出土したのみである。床面より20cm程度までの埋土を振るいにかけたが、鉄片1点を検出しただけであり、原位置を留めると考えられるような遺物も、ほとんど見られなかった。出土した耳環4つも、主体部からやや東で散らばるように出土しており、東側斜面から低くなっている地点にわたって、完形を含む多量の須恵器の破片が出土した。また西側からは須恵器の破片他、近世陶磁器の破片、石器等古墳に伴うものとは判断し難い遺物が少量出土したのみである。

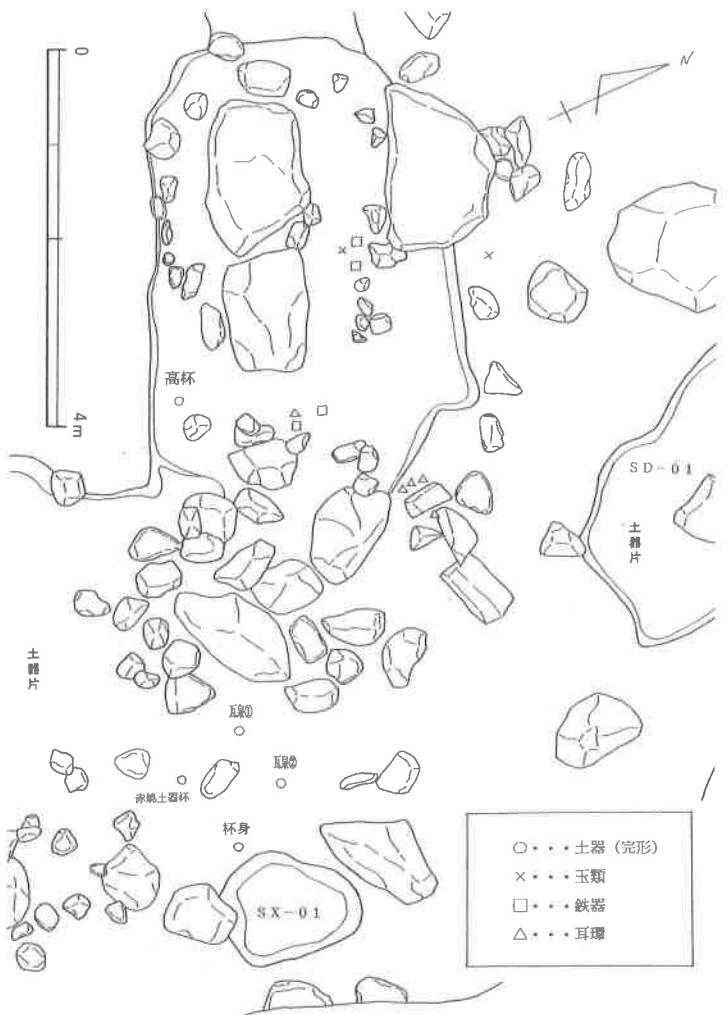
尚、周溝と考えられる溝状の遺構からは、甕を主体とした須恵器の破片が、多量に出土した。

#### 5. 出土遺物

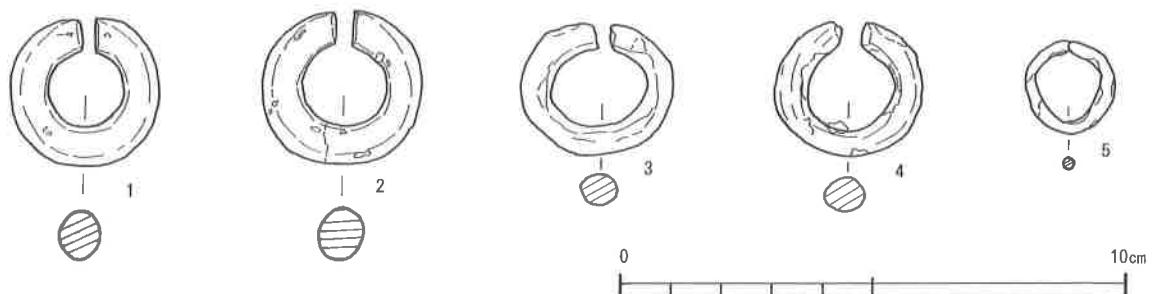
##### ○ 装身具（第10, 11図）

###### ・耳環（第10図1～5）

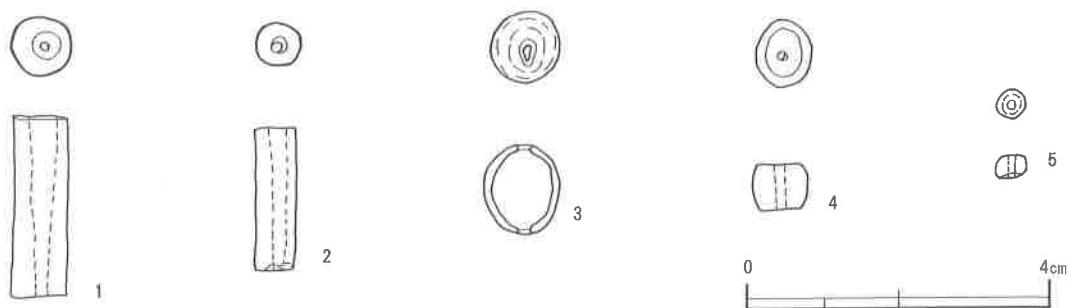
耳環は、1, 3, 4, 5が主体部のやや東側からまとまって出土し、2が主体部付近のベルトから出土した。1は金環であり、縦に立った状態で出土した。長径30mm, 短径29.5mm, 厚さ9mm, 重さ10.3gを測り、ほとんど真円形を呈する。金層の状態は良好である。2も金環であり、1とは所見にかなりの相違がある。長径・短径共に30mm, 厚さ10mm, 重さ6.3gを測り、やはり真円状を呈する。



第9図 7号墳遺物出土状況図 (1/80)



第10図 7号墳出土耳環実測図 (2/3)



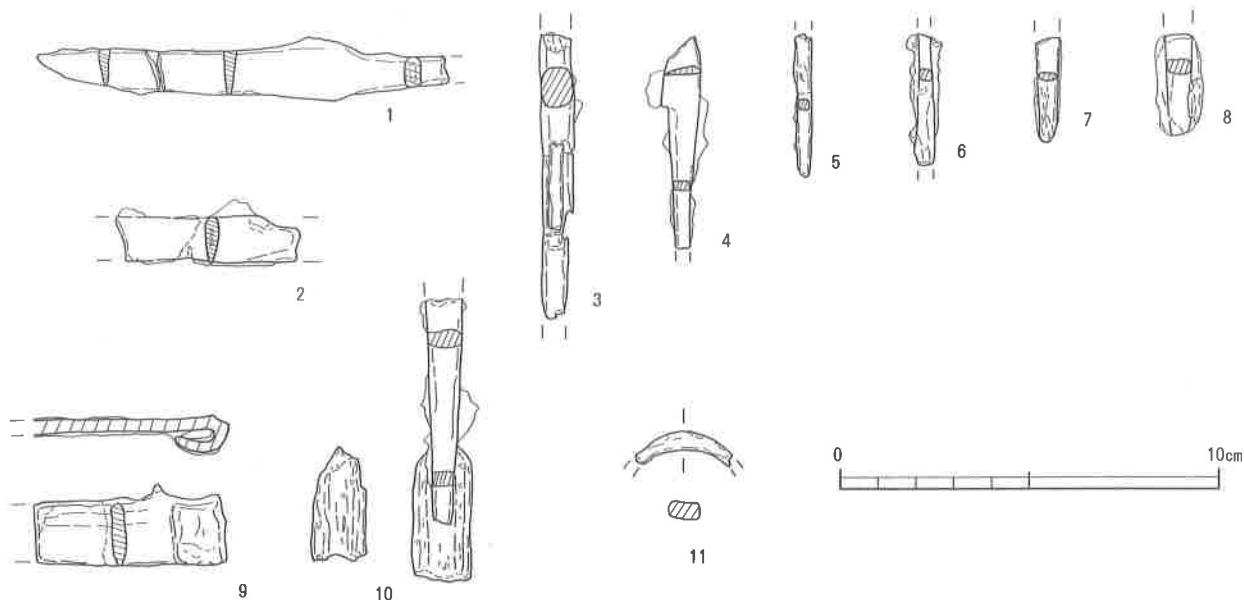
第11図 7号墳出土玉類実測図 (1/1)

1に比べて金層は薄く、部分的に剥落している。3は銀環であり、腐食が著しい。長径30mm、短径26mm、厚さ7.7mm、重さ14.3gを測る。4も銀環で、3と対であろう。やはり腐食しており、銅芯がむき出しになっている。長径29mm、短径27mm、厚さ7mm、重さ15.0gを測る。5も1、3、4と近い位置から出土しており、径18mm、厚さ2.5mm、重さ1.2gを測る。耳環ではなく、つなぎの金具である可能性もある。

#### ・玉類 (第11図1~5)

玉類は、5点出土した。平成3年の試掘調査で発見された2を除いては、全て主体部およびその付近からの出土である。

1は碧玉製の管玉で、長さ24mm、径7.5mm、重さ2.9gを測る。片側より穿孔し、孔径は4mmを測り、色調はダークグリーンである。2も碧玉製の管玉で、長さ19mm、径6mm、重さ1.8gを測る。片側より穿孔し、孔径は2mmを測り、色調は、ダークグリーンである。3は主体部床面付近より出土した空玉である。腐食しているが銀製であろうか。長さ12mm、径10mm、孔径2.5mm、重さ1.2gを測る。4は



第12図 7号墳出土鉄器実測図 (1/2)

主体部の床面付近（3の近く）から出土したガラス玉で、長さ6mm, 幅7.5mm, 孔径1mm, 重さ0.7gを測り、色調は、濃いコバルトブルーである。5も主体部より出土したガラス小玉であり、長さ3mm, 幅4mm, 孔径1mmを測る。

#### ○ 鉄器（第12図1～11）

- ・刀子（1, 2）1は茎の先端部を欠失し、残存する茎部に木質が確認できる。復元全長111mm, 中央部巾12mmを測る。2は刃部の一部で、先端部と茎部を欠失する。残存長47mm, 巾13mmを測る。
- ・鉄鎌（3～8,10）4は片刃式の鉄鎌で、茎部を欠失する。残存長55mmを測る。10は刃部を欠失し、木製の柄の破片を伴う。残存長59mmを測る。
- ・穂摘み具（9）穂摘み具と考えられる鉄製品で、片側を欠失する。残存長51mm, 巾15mmを測る。
- ・その他（11）11は輪状の鉄製品の一部で、長さ25mm, 巾8.5mm, 復元径38.5mmを測る。或いは馬具の一部であろうか。

#### ○出土土器（第13～16図）

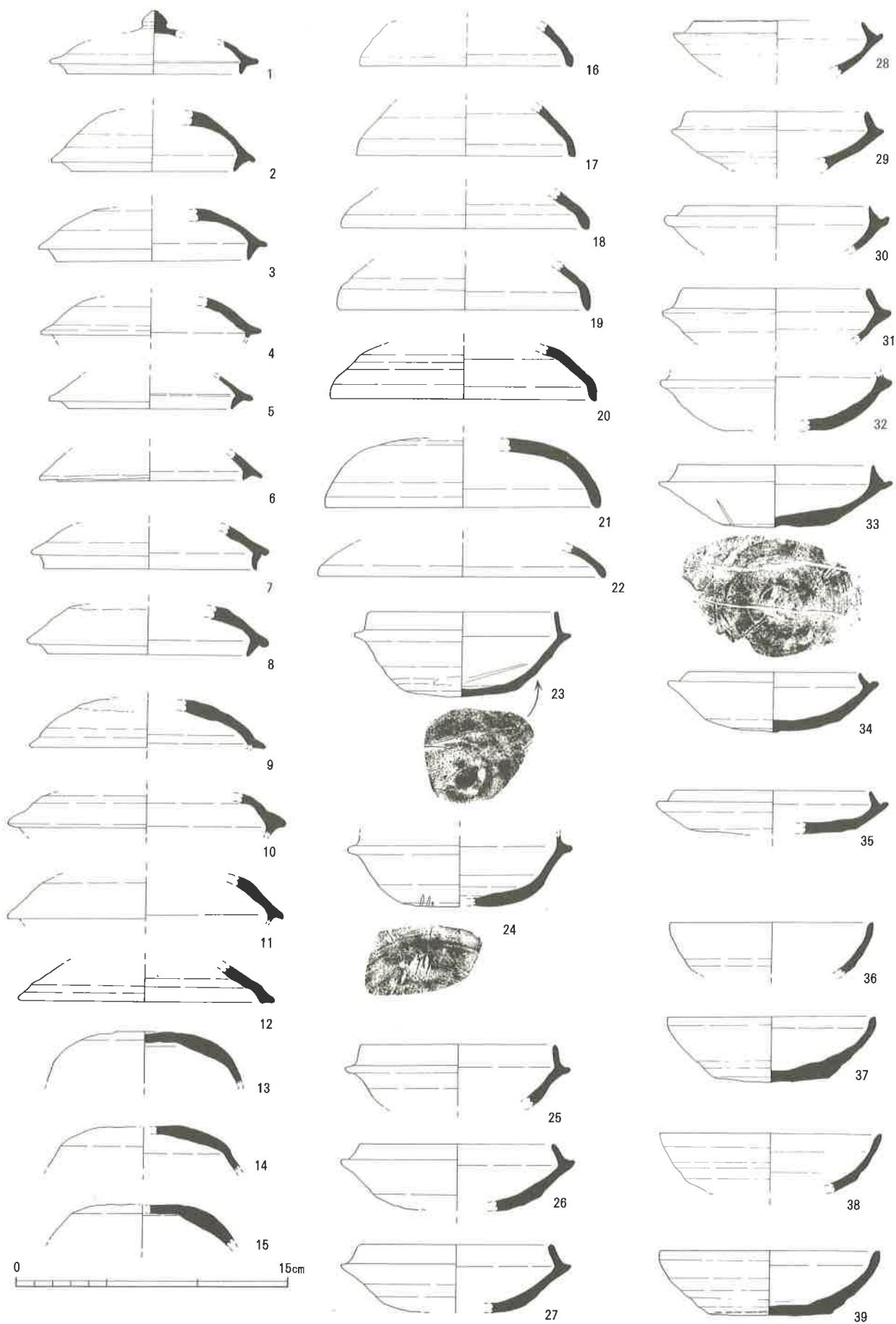
主体部東側の包含層及び周溝状遺構堆積土中から、須恵器（杯蓋・杯身・蓋・高杯・壺・瓶・甕・穂）土師器（高杯・甕）、他に似須恵土師器、青磁（混入品と考えられる）などが出土している。ほとんどが破片であり、完形品は2点に過ぎないが、図化に耐える土器は総数67個体であり、図化しえない細片も加えると80個体前後になるであろう。東側包含層から出土した土器片と、北側周溝状の遺構から出土した土器片が接合するなど、原位置に留まると考えられるものはほとんど皆無であろう。以下説明を加える。

##### ・須恵器

###### 杯蓋（1～21）

1は宝珠状のつまみ付きの蓋である。天井部を欠失し、口縁部とつまみ部との接点は欠失するが、同一個体である。復元口径98mm, 受部径116mm, 復元器高36mmを測る。調整は外面ヘラ削り、内面ナデ調整で、一条の沈線がめぐる。口縁部端部は丸みをおび、内傾するかえりを有す。色調は暗灰色を呈し、胎土は微砂粒を含み、焼成はやや不良である。2は天井部を欠損する。復元口径91mm, 受部径113mm, 残高35mmを測る。調整は外面ヘラ削り、内面ナデ、口縁端部は丸みをおび、内傾するかえりを有す。色調は暗灰色で、胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。3も天井部を欠失する。復元口径106mm, 受部径126mm, 残高29mmを測る。調整は内外面共にナデ、天井部は静止ヘラ削りを施す。口縁端部は丸みをおび、内傾するかえりを有す。色調は暗灰色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。4は天井部とかえりを欠損する。受部の復元径123mm, 残高22mmを測る。調整は内外面共にナデ、口縁端部は丸みをおびる。色調は灰色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。5は天井部を欠損する。復元口径91mm, 受部径113mm, 残高13mmを測る。調整は内外面共にナデであり、内面に一条の沈線がめぐる。口縁端部は丸みをおび、内傾するかえりを有する。色

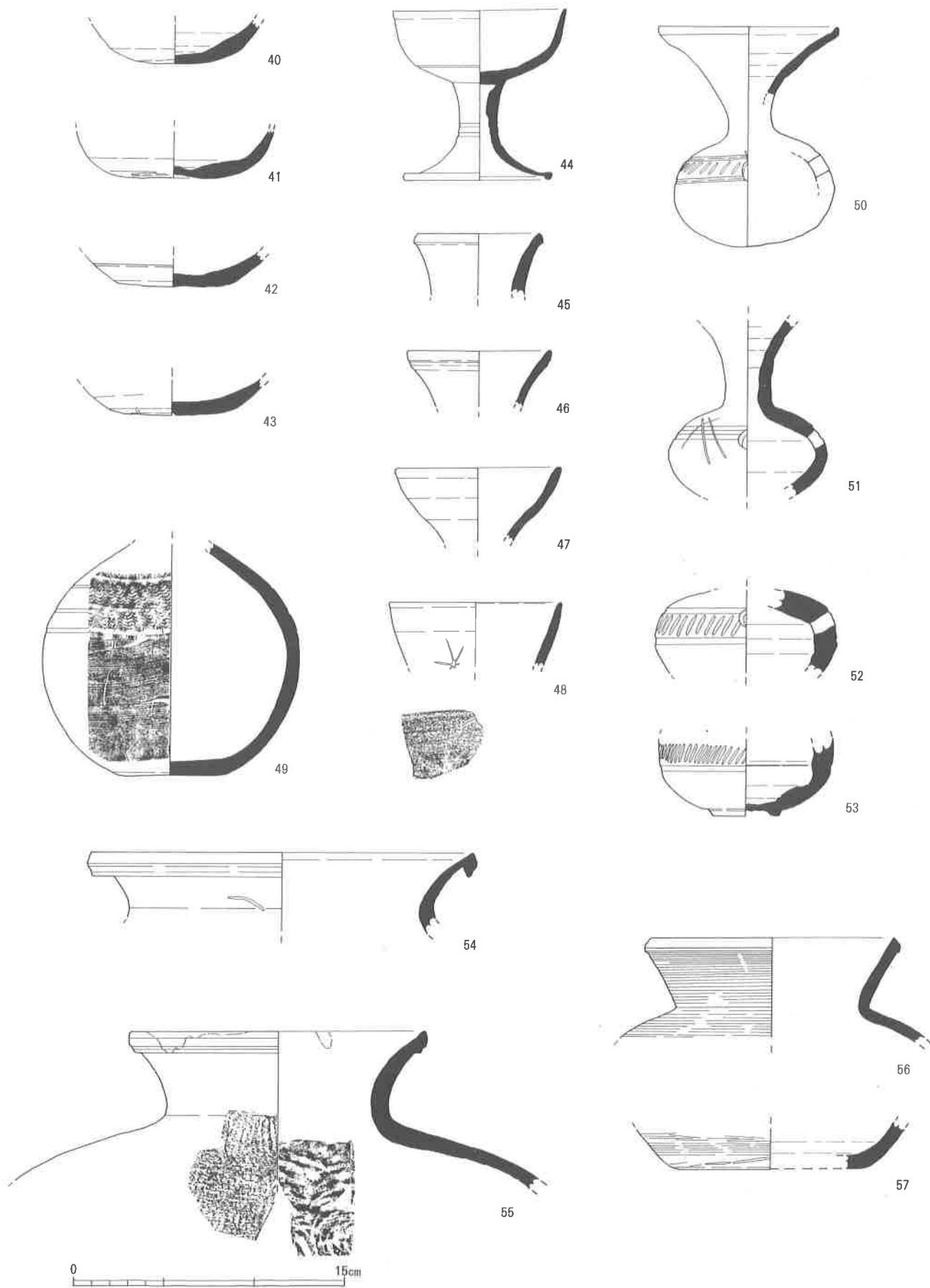
調は暗青灰色で胎土は微砂粒が多く、焼成はやや不良である。6は蓋の口縁部で、復元口径103mm, 受部径124mm, 残高16mmを測り、受部はやや上向きに引き出され、立ち上がりは短く、内傾する。調整は内外面共にナデ、色調は暗灰色で胎土は微砂粒多く、焼成は良であり、焼成時に歪みが生じている。7は復元口径118mm, 受部径133mm, 残高24mmを測る。調整は内外面共にナデ、口縁端部は丸みをおび、かえりはやや内傾しつつ外反している。胎土は微砂粒を含み、焼成はやや不良である。8も天井部を欠損する。復元口径112mm, 受部径134mm, 残高27mmを測る。調整は天井部は荒いヘラ削り調整で、他は内外面共にナデ、口縁端部は丸みをおび、内傾するかえりを有する。色調は淡い赤褐色を呈し、胎土は微砂粒が多く、焼成はやや不良である。9は天井部とかえりを欠損する。受部の復元径130mm, 残高25mmを測る。調整は天井部付近の外面は粗いヘラ削り、体部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整を施す。色調は灰褐色を呈し、胎土は微砂粒が多く、焼成は良好である。10も天井部及びかえり部を欠損する。受部の復元径は154mm, 残高22mmを測る。調整は外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整で、内面天井部付近に段を有し、口縁端部は丸みをおびる。色調は青灰色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。11も天井部とかえりを欠損する。受部の復元径は152mm, 残高24mmを測る。調整は内外面共にナデ、色調は灰褐色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成はやや不良である。12は明瞭なかえりを有しない（口縁端部に段を有する）蓋で、やはり天井部を欠損する。復元口径128mm, 受部径141mm, 残高21mmを測る。調整は内外面共に回転ヘラ削り調整で、内面に段を有する。色調は灰色で胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。13, 14, 15は、口縁端部を欠損する。13は復元天径47mm, 残高28mmを測り、天井部と体部の間には明瞭な境界を有しない。調整は内外面共にナデであるが、天井部に一部静止ヘラ削りを施し、ヘラによる押圧痕が認められる。色調は外面が淡灰黒色で、内面が灰色を呈し、胎土は微砂粒を含み、焼成は良であり、内面にヘラ記号を有する。14は復元天径54mm, 残高21mmを測る。調整は天井部はヘラ削り調整で体部及び内部はナデを施し、天井部と体部の間にやや不明瞭な段を有する。色調は灰色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成はやや不良である。15も天井部と体部の間に不明瞭な境界を有する。復元天径45mm, 残高23mmを測る。調整は天井部ヘラ削り、体部及び内部はナデを施す。色調は明黄褐色を呈し、胎土は微砂粒を含み、焼成は不良である。16~22はかえりを有しない杯蓋で、いずれも天井部を欠損しており、天井部の状況を伺い知ることができるのは、21のみである。これら全ては、天井部と体部・口縁部の境界が不明瞭（段を有さない）で、口縁端部が丸みをおびるものである。16は復元口径118mm, 残高32mmを測る。調整は内外面共にナデを施す。色調は青灰色を呈し、胎土は微砂粒を含み、焼成は良。17は復元口径122mm, 残高28mmを測る。調整は内外面共にナデを施す。色調は暗灰褐色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成は良。18は復元口径137mm, 残高20mmを測る。調整は内外面共にナデを施すと考えられるが、剥落が著しく、詳細は不明である。色調は灰色を呈し、胎土は微砂粒が多く、焼成は不良である。19は復元口径140mm, 残高25mmを測る。調整は内外面共にナデを施す。色調は淡い灰黒色を呈し、胎土は微砂粒を含み、焼成は良好である。20は復元口径147mm, 残高30mmを測り、調整は内外面共に回転ヘラ削り後、強いヨコナデを施す。色調は灰褐色を呈し、胎土は微砂粒を含み、焼成は良好。21は唯一天井部の状態を伺い知ることのできる資料で、復元口径151mm, 残高38mmを測る。体部及び口縁部との境に段を有せず、口縁端部は丸みをおびる。調整は天井部にはカキ目調整を施し、他は内外面共にナデを施す。色調は灰褐色を呈し、胎土は砂粒多く、焼成は良である。22は復元口径159mm, 残高18mmを測り、調整は内外面共にナデを施す。色調は黒色を呈し、胎土は微砂粒を含み、焼成は良好である。



第13図 7号墳出土土器実測図1 (1/3)

## 杯 身

23~34は杯身である。底部を欠損するものが多いが、立ち上がりが比較的長く、やや内傾し、口縁端部が丸みをおび、受部が水平に引き出されるものと、立ち上がりが短く、やや強く内傾し、口円端部が尖り、受部が上向きに引き出されるものがある。調整は体部外面に回転ヘラ削り、底部外面に静止ヘラ削り、内面はナデ調整を施したものが多い。23は完形の杯身であり、口径105mm, 受部径120mm, 底径57mm, 器高47mmを測る。造りは全体的に粗雑で、調整は低部は静止ヘラ削り、体部は回転ヘラ削り調整後ナデを施す。内面はナデ調整で、底部にヘラ記号を有する。比較的長く、やや内傾するかえりを有し、受部は水平に引き出される。色調は灰黒色～灰色で胎土は微砂粒多く(砂粒混り) 焼成は良である。24は底部の一部及びかえり部を欠損する。受部の復元径は124mm, 底径38mm, 残高39mmを測る。調整は外面低部は静止ヘラ削り、体部回転ヘラ削り、内面はナデを施す。25は底部を欠損する。復元口径107mm, 受部径124mm, 残高34mmを測る。器型は23とほぼ同型で、調整は内外面共にナデを施す。色調は灰黒色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。26は底部を欠損する。復元口径107mm, 受部径129mm, 残高37mmを測り、内傾し、端部が丸みを帯びるかえりと、水平に引き出される受部を有する。調整は外面は底部にヘラ削り、体部及び口縁部はナデ、内面もナデを施す。色調は暗灰色で、胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。27も内傾し先端部が丸みを帯びるかえりと水平に引き出される受部を有するもので、底部を欠損する。復元口径105mm, 受部径126mm, 残高37mmを測る。調整は体部に回転ヘラ削り、他は内外面共にナデを施す。色調は灰色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。28はかえりがやや強く内傾して端部は尖り、受部が上向きに引き出される杯身で、底部を欠損する。復元口径94mm, 受部径116mm, 残高29mmを測る。調整は内外面共にナデを施す。色調は明灰色を呈し、胎土は微砂粒を含み、焼成は良好である。29は底部を欠損する。復元口径102mm, 受部径118mm, 残高32mmを測り、内傾し端部が丸みをおびるかえりと水平に引き出される受部を持つ。調整は外面体部に回転ヘラ削り、内面にナデを施す。色調は灰色を呈し、胎土は微砂粒を含み、焼成は良好である。30は底部を欠損する。復元口径102mm, 受部径124mm, 残高24mmを測る。かえりはやや強く内傾し端部は尖っている。受部は上向きに引き出され、口縁端部は丸みをおび、軽い段を有する。調整は体部がヘラ削り後ヨコナデ、内面もヨコナデを施す。色調は灰色で、胎土は微砂粒を含み、焼成は良である。31はやや内傾するかえりを持ち、底部を欠損する。復元口径103mm, 受部径126mm, 残高29mmを測り、受部は水平に引き出される。調整は内外面共にヨコナデ。色調は灰白色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成は良である。32は底部およびかえり部を欠損する。復元受部径127mm, 残高31mmを測り、やや偏平な器形で、受部は水平に引き出される。調整は内外面共にナデ。色調は灰色を呈し、胎土は微砂粒を含み、焼成は良好である。表面底部および内面にヘラ記号を有するが、破損のため詳細は不明である。33はやや強く内傾し、端部が尖ったかえりを有するもので、復元口径108mm, 受部径129mm, 底径51mm, 器高35mmを測る。調整は内外面共にナデ、底部にヘラ記号を施す。色調は青灰色で胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。34は復元口径90mm, 受部径116mm, 底径38mm, 器高33mmを測り、内傾するかえりと、やや上向きに引き出される受部を持ち、口縁端部は丸みを帯びる。調整は外面体部から口縁部と内面はナデを施し、体部下半及び底部には粗いヘラ削りを施す。色調は明赤褐色で胎土は微砂粒多く、焼成はやや不良である。35は偏平な杯身で復元口径108mm, 受部径128mm, 残高24mmを測る。調整は外面底部に静止ヘラ削り、体部は粗い回転ヘラ削り、口縁部外面と内面にはナデを施す。色調は淡い赤褐色で胎土は微砂粒多く焼成はやや不良である。36~39は、かえりを有しない杯である。36は底部を欠損する。復元口径113mm, 残高28mmを測り、調整は内外面共にナデである。色調は青

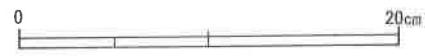
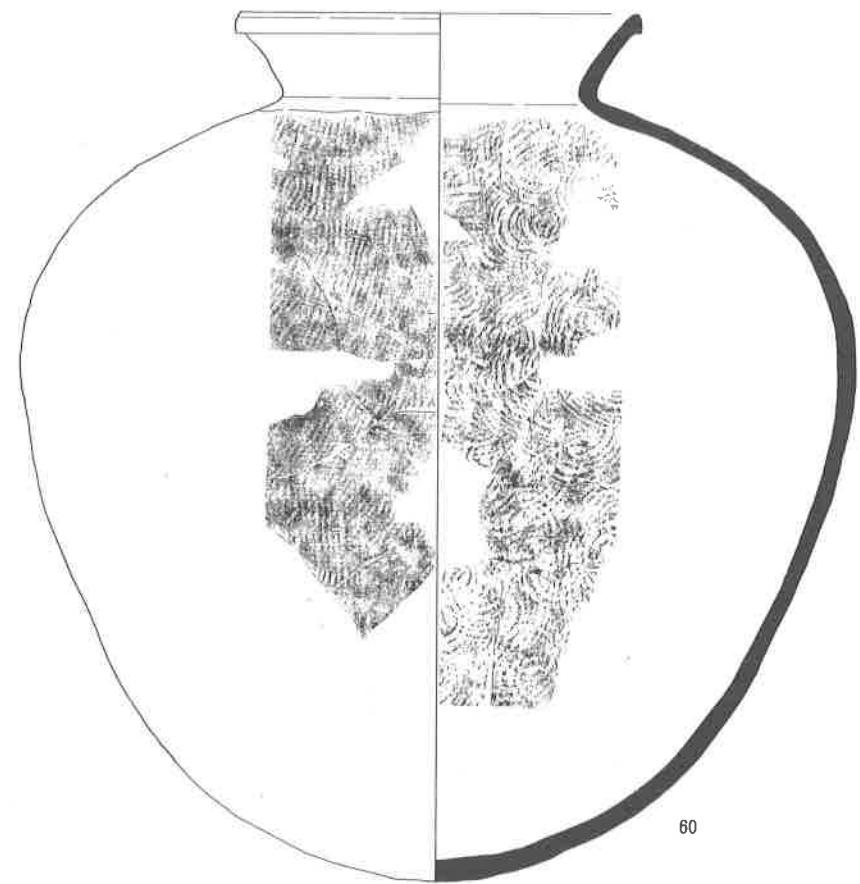
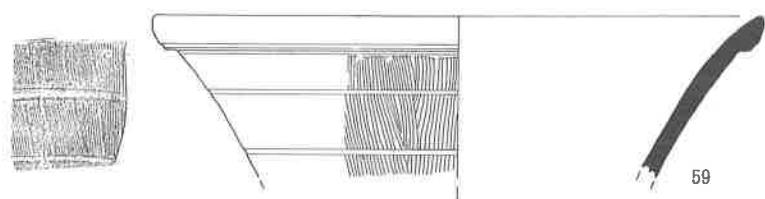
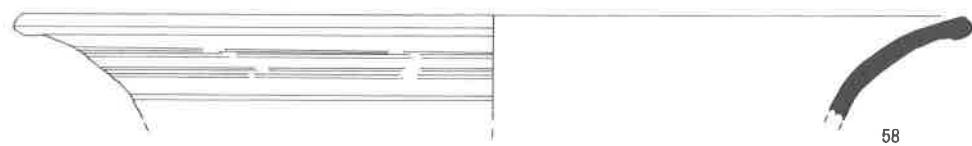


第14図 7号墳出土土器実測図2 (1/3)

灰色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。37は復元口径114mm, 底径62mm, 器高36mmを測る。調整は体部は回転ヘラ削り後ナデ、底部に静止ヘラ削り、それ以外の部位はナデを施す。色調は灰黒色で、胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。38は底部を欠損する。復元口径121mm, 残高32mmを測る。調整は外面全体に回転ヘラ削り、内部はナデを施す。色調は外面灰黒色、内面青灰色で、胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。39は復元口径122mm, 底径57mm, 器高36mmを測り、調整は外面体部下方に回転ヘラ削り、外面底部は静止ヘラ削り、外面体部上方及び内部はナデ調整を施す。色調は青灰色（内面黒色）で、胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。40～43は口縁部を欠損する杯・杯身である。40は底部の破片で、復元底径29mm, 残高22mmを測る。調整は外面底部が静止ヘラ削り、その他は内外面共にナデ調整である。色調は淡赤褐色で胎土は微砂粒多く、焼成は不良である。41は復元底径48mm, 残高26mmを測る。調整は内外面共にナデ、外面底部には静止ヘラ削りを施し、底部にはヘラによる押圧痕を有す。内面にヘラ記号を有するが、破損のため、詳細不明である。色調は暗灰色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。42は復元底径57mm, 残高20mmを測る。調整は内外面ともにナデを施し、底部は静止ヘラ削りで、体部に1条の沈線がめぐり、内面にヘラ記号を有す。色調は淡い灰褐色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成は良である。43は復元底径49mm, 残高20mmを測る。調整は内外面共にナデを施し、外面底部にヘラ記号を有する。色調は灰色を呈し、胎土はやや粗い微砂粒多く、焼成は良である。44は主体部付近から出土した高杯である。口縁部と底部の一部を欠損するが、ほぼ完形に近く復元できた。接合した一部の破片は、やや離れた溝状遺構の堆積土中から出土した。口径97mm, 脚部底径84mm, 器高95mm, 脚部高54mmを測る。調整は内外面共にナデ主体で、杯身部の体部と底部の境に1条の沈線が巡り、脚部にも2条の沈線が巡る。色調は淡灰色で、胎土は微砂粒を含み、焼成はやや不良である。

### 壺・瓶・甌類

45～48は口縁部のみの破片資料である。壺・瓶・甌類の一部であろう。45は溝状遺構の堆積土から出土した。復元口径68mm, 残高34mmを測る。調整は内外面共にナデ、口縁端部に段を有する。色調は暗灰色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。46は復元口径82mm, 残高29mmを測る。口縁端部は軽い段を有し、一条の沈線が巡る。調整は内外面共に横ナデを施す。色調は灰色で胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。47はラッパ状に開く口縁部の破片資料（甌か？）で、復元口径92mm, 残高41mmを測る。調整は内外面共にナデを施す。色調は青灰色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。48は4点の破片から成る資料で、口径93mm, 残高37mmを測る。調整は内外面共にやや強いヨコナデを施し、外面にヘラ記号を有す。色調は暗灰色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。49は壺の胴体部で、頸部及び口縁部を欠損する。胴体部の最大径143mm, 底径59mm, 残高129mmを測る。体部に3条の沈線を巡らせ、その間に波状文を施す。沈線の上部から頸部にかけてはナデ、沈線直下から底部にかけてはカキ目、内部はナデ調整を施す。色調は灰色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。50～53は甌で、4点（47を甌とすると5点）出土している。50は完形品で、口径100mm, 器高123mm, 胴部最大径90mmを測る。ラッパ状に大きく開く口縁を有し、底部は丸底である。体部に2条の沈線を巡らせ、その間に刺突文を施し、穿孔はその上からなされている。調整は底部から体部にかけては粗い静止ヘラ削り、口縁部にかけてはヘラ削り後ヨコナデを施し、口縁部外面にヘラ記号を有す。色調は淡灰色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成はやや不良である。51は口縁端部及び底部を欠損する。胴部最大径88mm, 残高99mmを測る。調整は頸部から口縁部にかけてカキ目を施していたようであるが、剥落のため詳細は不明確である。体部および内部



第15図 7号墳出土土器実測図3 (S=1/4)

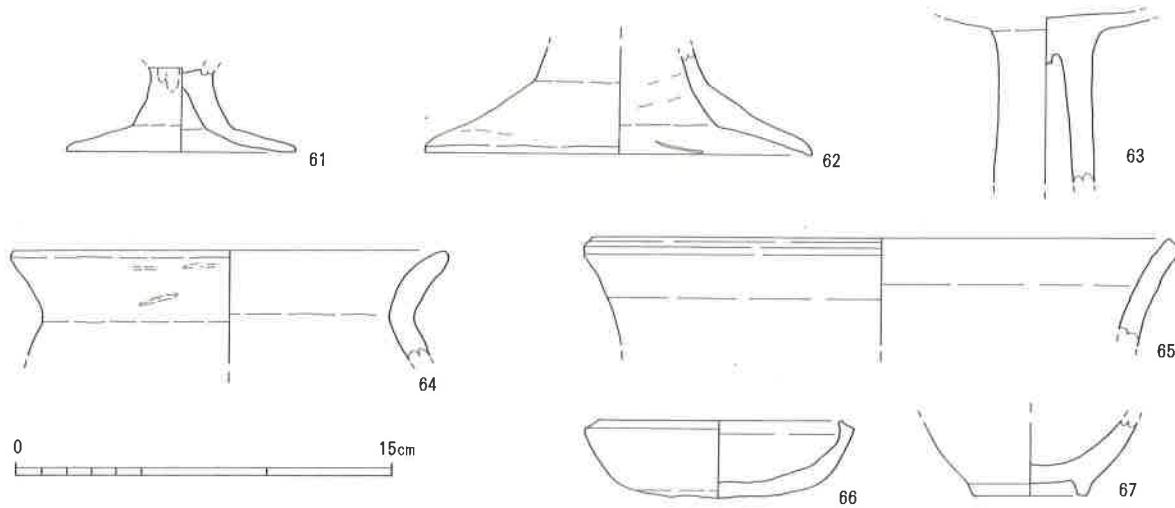
はナデ調整で、内部は強いヨコナデを施す。体部やや上方に2条の沈線を巡らせ、その上から穿孔されている。色調は灰色を呈し、胎土は砂粒多く、焼成はやや不良である。尚、体部外面にヘラ記号を有する。52は胴部の破片資料である。復元胴部径101mm、残高46mmを測る。2条の沈線を巡らし、その間に刺突文を施す。刺突文から上側の沈線にかかる部分に穿孔の跡が認められる。調整は外面ナデ、内面は段を有し、上側がナデ、下側がヘラ削りを施す。色調は外面が灰緑色の自然釉がかかり、内面は青灰色である。胎土は微砂を含み、焼成は良好である。53は高台を持つもので、復元胴部径98mm、底径43mm、残高43mmを測る。外面に沈線を巡らし、その上に刺突文を施しているが、刺突文の上にもう1条沈線が巡っていたと考えられる。調整は内外面共にナデ、内面底部に棒状工具による押圧痕が残る。色調は淡灰褐色を呈し、一部に自然釉を残す。胎土は砂粒多く、焼成はやや不良である。

### 甕・壺

54は甕の口縁部の破片資料で、復元口径213mm、残高44mmを測り、外反する。口縁端部は肥厚させ段を有し、段の下部に1条の沈線を巡らす。調整は内外面共にナデを施す。色調は灰色～灰黒色で、胎土は微砂粒多く焼成は良好である。55は甕の口縁部から肩部にかけての破片資料で、復元口径169mm、残高82mmを測る。口縁部はやや外反し、端部は肥厚させて段を有し、段の下部に沈線を巡らし、調整は内外面共にナデを施す。肩部はやや張った感じで、肩部から胴部にかけての調整は、外面に叩きを施し、内面に同心円状の当て具痕を残す。色調は灰色～青灰色で一部に自然釉の痕跡を留める。胎土は砂粒を含み、焼成はやや不良である。56は復元口径136mm、残高55mmを測る。口縁部はやや外反し、端部は肥厚させて段を形成し、下部に1条の沈線を巡らす。調整は口縁部外面はカキ目、肩部外面は剥落のため、不明確であるが、やはりカキ目調整であろう。内面はナデを施す。色調は暗灰色で、胎土は微砂粒含み、焼成はやや不良である。57は壺の底部の破片資料である。復元底径102mm、残高22mmを測る。調整は外面にカキ目を施し、底部は静止ヘラ削り、内面はナデである。色調は灰黒色を呈し、胎土は微砂粒多く焼成は良好である。58は大甕の口縁部の破片で、復元口径508mm、残高55mmを測り、強く外反する。端部はやや肥厚させて段を形成し、体部には数条の沈線が巡る。調整は内外面共にナデを施す。色調は灰褐色で、胎土は砂粒多く、焼成は良好である。59は甕の口縁部破片資料で、復元口径326mm、残高85mmを測り、やや外反する。端部はやや肥厚させて段を形成し、段の直下から一定の間隔をおいて、一条ずつの沈線が巡り、その間に櫛目状文を施す。色調は黒色で、胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。60は体部～底部の一部を欠損する。復元口径208mm、器高459mmで、胴部の最大径は中位よりやや上にあり、438mmを測る。やや外反し、段のある口縁部をもち、肩部はあまり張っていない。調整は口縁部は内外面共にナデ、肩部から胴部にかけては外面に格子状の叩き、内面に同心円状の当て具痕を残す。色調は灰色～暗灰色で胎土は微砂粒多く、焼成は良好である。

### その他の土器

61～65は土師器である。61は高杯の脚部から底部にかけての破片資料で、復元底径92mm、残高33mm、脚部上端径27mmを測る。調整は底部と内面はナデ、脚部外面はヘラ削り後ナデを施す。色調は明褐色で、胎土は微砂粒多く、焼成は不良である。62も溝状遺構から出土した高杯の脚部から底部にかけての資料で、復元底径154mm、残高43mmを測る。剥落が著しい為、調整は不明である。色調は明赤褐色を呈し、胎土は微砂粒多く、焼成は不良である。63は高杯の脚部の資料で、脚部径38mm



第16図 7号墳出土土器実測図4 (1/3)

残高70mmを測り、調整は脚部は縦方向のナデ、わずかに残存する杯部にもナデを施す。色調は明褐色で胎土は微砂粒多く、焼成はやや不良である。64は甕の口縁部の資料で、復元口径176mm、残高43mmを測る。調整は剥落がひどく、不明確であるが、外面は口縁部ナデ、体部にハケ目、内面は口縁部にハケ目、体部にナデを施すようである。なで肩の胴体を持つと推定され、色調は明黄褐色で、胎土は微砂粒多く、焼成は不良である。65は甕の口縁部で、復元口径232mm、残高43mmを測り、やや外反する。口縁端部には2条の沈線を巡らし、調整は内外面共にナデを施す。色調は明褐色で、胎土は砂粒を含み、焼成はやや不良である。66の杯身は、形状は須恵器に近いが、胎土は土師器に近い、いわゆる似須恵土師器である。形状・調整共に粗雑な造りで、焼成は甘く、軟質なものである。復元口径96mm、底径47mm、器高31mmを測る。内傾するかえりを有するが、受け部との境界はややあいまいである。調整は内外面共にナデを施し、外面底部にヘラ記号を有する。色調は褐色で胎土は砂粒を含む。67は青磁の底部の破片で、主体部西側から出土した。混入品であろう。高台の底部径44mm、残高27mmを測り、胎土は極めて精良で、明緑色の釉を施す。

#### ○出土石器（第17図）

主体部周辺と、調査区西側の包含層より、石器が数点出土した。西側では土器は少量しか出土していない。これらの石器は古墳に伴う遺物ではなく、混入品であると考えられる。これらのうち、特徴のあるものを図化した。以下説明を加える。

1は調査区西側より出土した安山岩製の凹基式の石鎚である。薄手の剥片を使用しており、長さ28mm、幅15mm、厚さ2mmを測る。

2は2次加工のある黒曜石製の石器の先端部で、現存長10mm、幅4mm、厚さ1mmを測り、端部から全体にわたって緻密で丁寧な2次加工を施す。石錐の先端部であると考えられる。

3は先端部を欠損する剥片で、残存部長20mm、幅14mm、厚さ4mmを測り、両サイドの刃部に使用されたことを示す微細な剥離と鬱状裂痕が認められる。

4は黒曜石製の剥片で、長さ18mm、幅20mmを測り、上下両側に折れた痕跡を有する。両サイド

の刃部に使用痕を残しており、その細かい剥離の状態から、サイドスクレーパー（削器）的に使用されていたと考えられる。

5はサヌカイト製のスクレーパーで、 $38 \times 24\text{mm}$ 、幅 $6\text{mm}$ を測る。横長の剥片を使用しており、刃部に簡単な2次加工を施すが、使用痕は認められない。

6は黒曜石製の剥片であり、長さ $22\text{mm}$ 、幅 $17\text{mm}$ 、厚さ $2\text{mm}$ を測る。腹面と背面では加撃された方向が逆になっている。両側の刃部に微かな使用痕を有する。

7～10は全て黒曜石製の剥片である。

7は長さ $29\text{mm}$ 、幅 $12\text{mm}$ 、厚さ $2\text{mm}$ を測り、刃部に使用痕を残す。2次加工の痕跡は有していないが、小型のナイフのような形状を呈している。

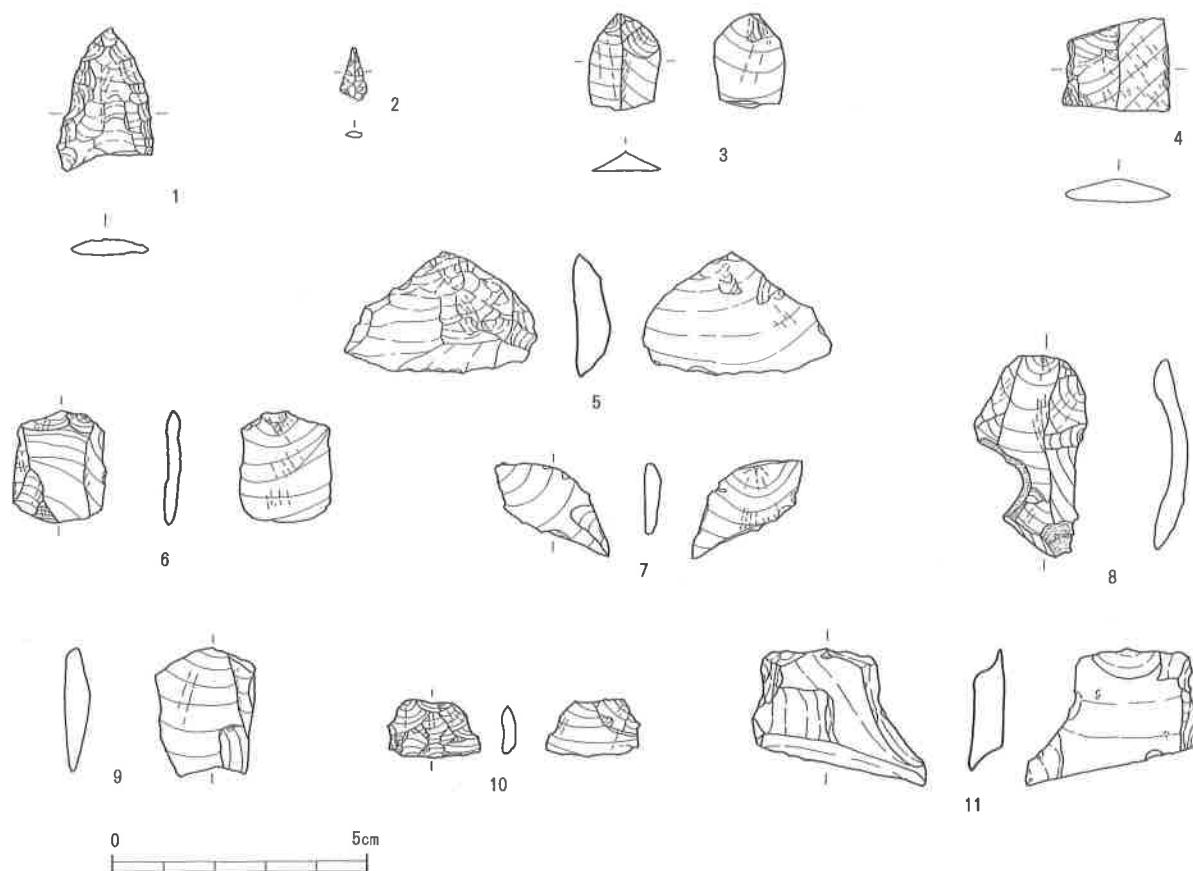
8は長さ $40\text{mm}$ 、幅 $23\text{mm}$ 、厚さ $3\text{mm}$ を測る。

9は $24 \times 20\text{mm}$ 、厚さ $4\text{mm}$ を測る。

10は $11 \times 17\text{mm}$ 、厚さ $3\text{mm}$ を測る。

11はサヌカイト製の剥片で、 $27 \times 34\text{mm}$ 、厚さ $6\text{mm}$ を測る。

これらの石器は、前述のように古墳に伴うものとは考えにくく、付近に別の遺跡が存在する可能性もあるが、確定はできていない。この地域一帯はたび重なる土砂崩れに見舞われたという記録もあり、これらの遺物が混入した可能性も指摘しうるであろう。



第17図 出土石器実測図 (2/3)

## IV. まとめ

### (1) 遺構について

萩の原7号墳は、先に述べたように破壊が進行していて、遺構の残存状況も悪く、倒壊した腰石の配列と、掘り方の状態から形状を考察するより他にないが、腰石が元の位置のまま、北側に倒壊したと想定して、腰石の厚みを考慮しつつ石室の玄室床面の大きさを推定すると、幅は内幅でおおよそ160cm～180cmとなる。長さの方は、奥壁が残存していないことから推定によるしかないが、200cm～250cm程であったと考えられる。従って、玄室床面は縦長の長方形形状を呈しており、萩の原古墳群中では、標準的な規模の横穴式石室を有していたと推測される。西側の奥壁は、それらしい大石が付近に無いことと、掘り方の緩やかな掘り込みとを考え併せると、さほど大きな石を使用していたとは考えにくい。東側は斜面になっており、墓道を形成する上で、必ずしも適しているとは言い難く、或いは東側が奥壁で、西側に入口がくる状況も考えられるが、西側には框石・閉塞石の痕跡も皆無であった。また東側に向かって低くなる地形・堀り方の形状に加えて、遺物も大半が東側で出土していることからも、やはり入口は東南東方向としてよいと考えられる。

出土遺物の散乱の仕方を見ると、開墾等で7号墳を破壊する際に、墳丘の盛土や、石材を低くなっている東側に落とし込んで平らにならした状況が見て取れる。ただ、出土した遺物の比較的豊富な内容から考えると、7号墳の石室は築造後、ある程度早い時期に崩壊を来し、それ故に盗掘を免れたと考えることもできよう。

### (2) 出土土器の検討

これまでに説明を加えた7号墳の須恵器を中心とした土器は、遺構の損失状況に比して豊富であることは前にも述べたが、個体数は多いものの破片資料がほとんどで、完全にその形状を知りうる資料は少なく、口径を推定復元して図化した資料も多く含まれる。その中で唯一、数がある程度まとまっていて、破片も比較的大きいものが多く、変遷をとらえられる杯身を例に挙げて時期を検討し、7号墳の造営時期について考察を加えたい。

体部および底部を欠失している資料も多いため、立ち上がり及び口縁部の形状により分類する。

7号墳出土の須恵器杯身は、それらの型式上の特徴より、まず立ち上がりを有するものと、立ち上がりが消失しているものとに大きく分類できるが、立ち上がりを有するものも3型式に分けることができ、計4型式に分類できよう。

I類・・・立ち上がりが比較的長く、やや内傾していて受部が水平に引き出され、  
口縁端部は丸く収まるもの。(例: 23, 24, 25)

II類・・・立ち上がりはやや短く、内傾していて、受け部はやや上向きに引き出され、  
口縁端部は丸く収まるもの。(例: 26, 27, 29, 31)

III類・・・立ち上がりは短く、強く内傾していて、受け部は上向きに引き出され、  
口縁端部はやや尖っているもの。(例: 28, 30, 33, 34, 35)

IV類・・・立ち上がりを有しないもの。(例: 36～39)

資料の遺存状況が一様でないため、すべての杯身をいずれかに分類することは出来なかつたが、大まかにまとめると、立ち上がりが比較的長くやや内傾し、口縁端部が丸みをおびて、受部が水平に引き出されるものと、立ち上がりが短く、やや強く内傾して先端部が鋭く、受部が上向きに引き出されるもの、更にそれらの中間的な様相を呈するもの、最後に立ち上がりを有しないものに分けられる。

I～III類の杯身は、いずれも口縁端部に段を有さないもので、九州における小田編年のIII b期（6世紀後半～6世紀末）に収まるものと考えられるが、萩の原7号墳においては、上記の類型において、I類→II類→III類の順で若干の時期差を生じているものとみてよいであろう。

中村編年においては、I類はII型式4段階、II類・III類はII型式5段階、IV類はIII型式1段階、実年代では6世紀末～7世紀前半に比定できると考えているが、III類においては、同型式内において若干の形態的な特徴の差異が看取される。これを微妙な時期差の現れと考えるか、あるいは地域性・供給元等の違いと考えるかは今後の課題としたい。

#### ・その他の須恵器について

杯蓋は上記の杯身とセット関係を成すと考えられるが、かえりを有しないものとかえりえを有するものに分類でき、前者は天井部と口縁部の間の稜が消失したII型式4段階以降のものであり、後者は宝珠状の摘みを有するIII型式1段階前後に比定できると考えられる。その他、出土した須恵器には高壺・壺・甕・甌等の器種があるが、甌は頸部が細く、口縁部がラッパ状に開くものや、底部に高台を有するものなど、比較的新しい型式の物であり、甕の調整は格子状の叩き文が中心となっている。これらは7世紀代の特徴を示すものといえる。

すなわち、須恵器全体でみると、中村編年においてはII形式4段階～III形式2段階、小田編年ではIII b～V期の須恵器が出土している。

以上のことから、7号墳は6世紀末頃から7世紀の前半にかけて造営されており、複数回の追葬が行われていた可能性が指摘できるであろう。

また、形状は須恵器を模しているが、胎土および焼成は土師器に近い、いわゆる赤焼き土器(66)も出土しており、この地方の地域性を示す資料であるといえる。これらも含めて萩の原古墳群のみならず、この地域から出土した須恵器を集成し、その地域性を検討するのも今後の重要な課題であると考えられる。

### (3) 耳環について

萩の原7号墳からは、はっきりしているもので4個の耳環が出土しているが特に金環（1，2）の方に、幾つかの注目すべき点がある。

この2つの金環は、他に対となる耳環が確認できなかつたため、一对として使用された可能性はある。しかし1，2の金環は径や厚さこそ類似しているように見えるが、その所見には大きな相違点を見出すことができる。まず形状・色調が1と2では異なる上、1は10.3g, 2は6.3gと、重量の点においても、かなりの違いが認められる。更に、1の方は2に比べると金層が厚く、金張加工と考えられ、2の方については、銅管に鍍金加工を施した中空耳環と考えられる。また、1の方も3・4に比べると重量が軽く、或いは中空とも考えられるが、詳細は不明である。

一方、銀環（3，4）の方は形状・重量共に類似しており、1対としての製作及び使用が想定しうる。腐食が著しいが、子細に観察すると金層の痕跡が認められるようでもあり、金環として製作されたものかもしれない。詳細な分析が必要であろう。

中空耳環は、中実のそれと比べて数が少なく、製作にもより高度な技術が要求されると考えられるため、7号墳からの出土が被葬者の政治的性格に基づくものか、或いは時期差・その他の要因によるものかを、今後の資料の増加や研究成果を待って再検討する必要があると考えられる。

・耳環計測表

	長径(mm)	短径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
耳環1（金環）	30.0	29.5	9.0	10.3
耳環2（金環）	30.0	30.0	10.0	6.3
耳環3（銀環）	29.0	27.0	7.5	14.3
耳環4（銀環）	29.0	27.0	7.0	15.0
耳環5	18.0	17.5	2.5	1.2

### （3）7号墳の造営時期について

7号墳の造営時期は、繰り返し述べているような遺構の遺存状況であり、石室の検討からの推測は困難であるため、出土遺物によるしかないが、須恵器の検討で述べたように、7号墳の築造時期は6世紀末頃に求めてよいであろう。その後7世紀前半頃までの使用が考えられ、数回にわたって追葬が行われていた可能性が指摘できる。

このことは、平成元年度に調査された6号墳よりも造営された時期はやや下ることを意味するが、7号墳が、6号墳よりも高位に位置しており、選地的に下位に位置する古墳が先行すると想定すれば、矛盾はないと考えられる。

また、7号墳はもっとも近い5号墳からもおよそ200m離れた地点に位置し、高さも8m高位にあること、さらに主軸・開口方向も他の古墳と異なるため、付近に1～6号墳とは別の一群が存在していた可能性も考えられるが、出土した耳環以外の遺物の内容・石室の規模等は、萩の原古墳群中の他の古墳と大きく異なることはなく、同一に近い集団により営まれていたと考えるのが自然であろう。

## V. おわりに

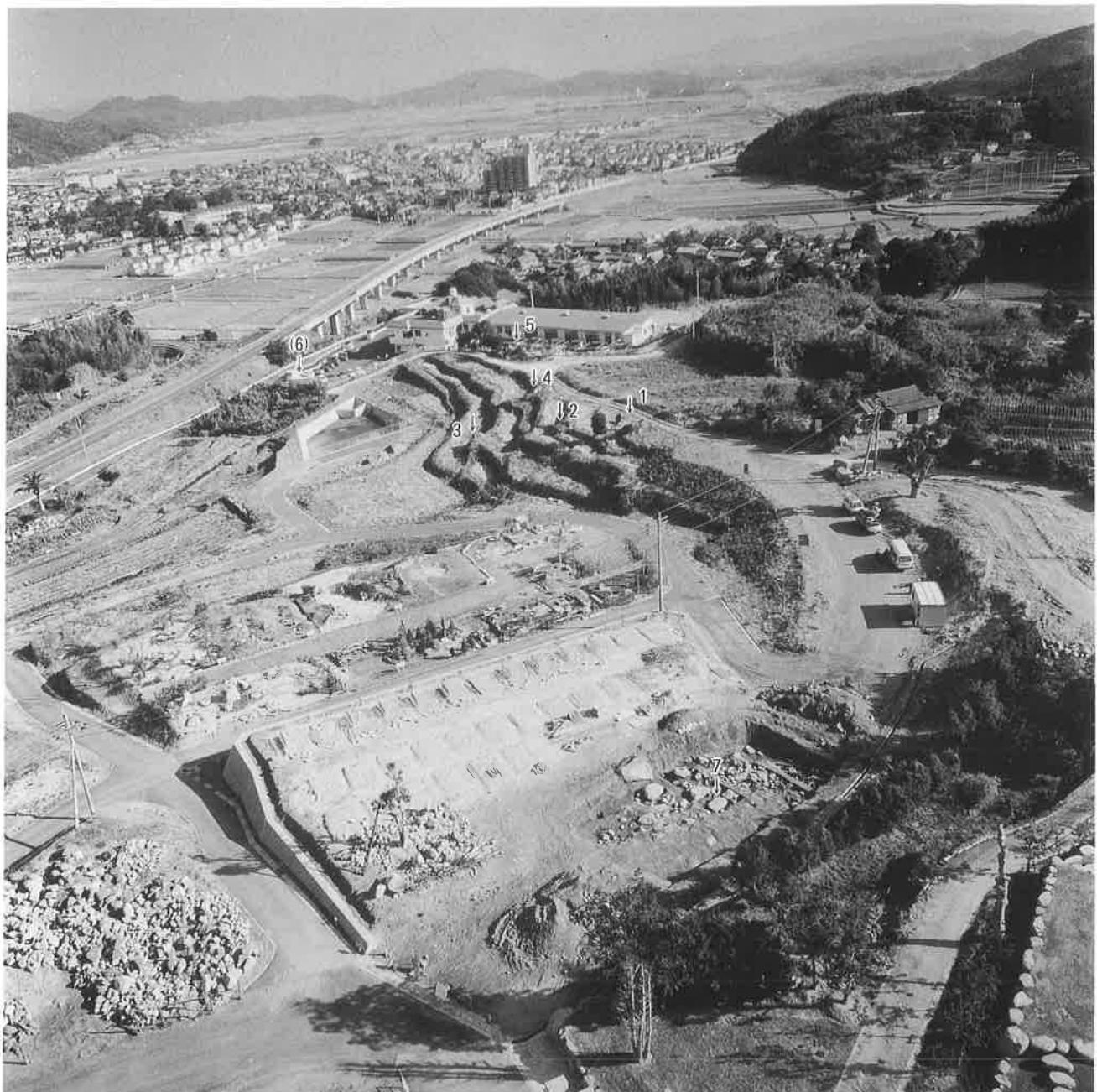
今回の調査では、東側斜面において多量の石が敷石状に散らばっているのを検出した。おそらく、古墳や周辺の地形に手が加えられた際に形成されたものと考えられる。本来ならばこれらの石は飛ばして、古墳の遺構そのものや地山の検出を行うことに留意すべきであったが、多数の須恵器を伴っていたため、古墳の石材も混入している可能性も考えて躊躇したために、中途半端に残してしまい、その為調査に余分な時間を掛けただけでなく、実測図や写真も見辛いものとなってしまった。ひとえに調査員の未熟のいたすところで、今後の反省点としたい。

萩の原古墳群は、今回調査を行った7号墳を含めて現在のところ7基が確認されているが、周辺は立地・地形ともに古墳を営むのに適しているため、今後更に付近から古墳が発見されることも考えられ、古墳群としての規模・構成が更に拡大する可能性を秘めている。今後の資料の増加により、今回の調査において不十分であった事項の検討・解明がなされることを期待して、本報告の締めくくりとする。

図

版



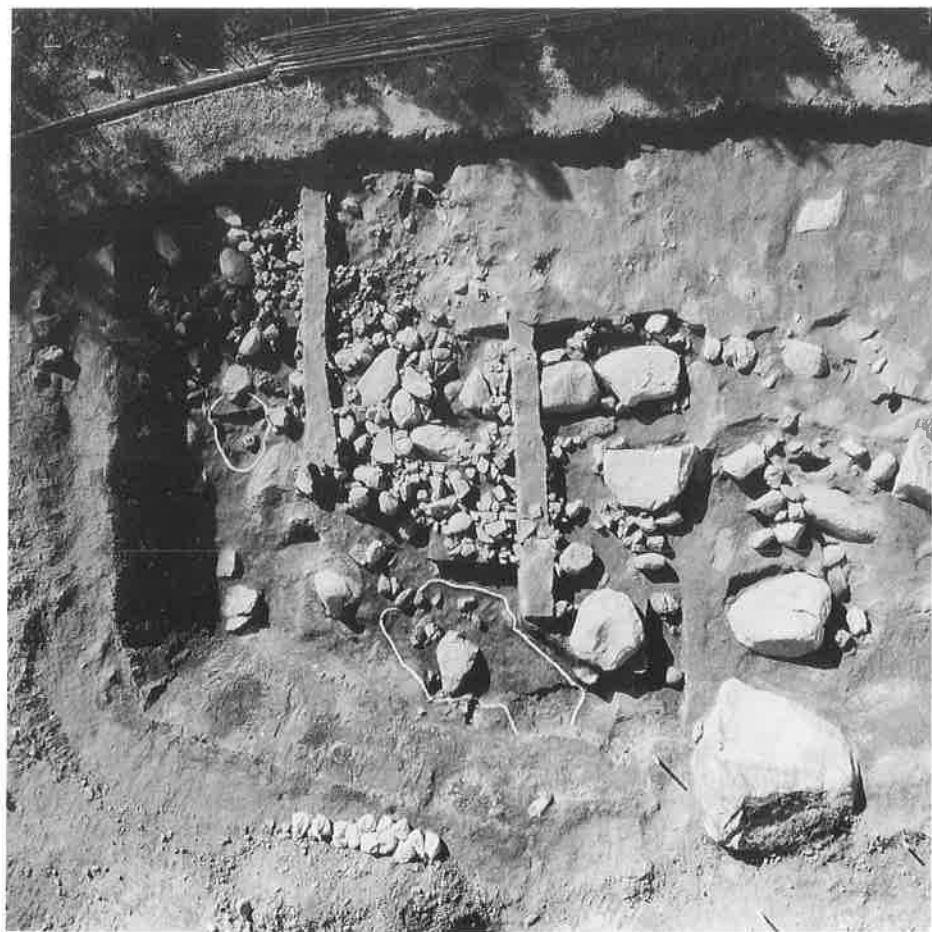


萩の原古墳群全景〔一貴山・深江平野を望む〕(南西から)

図版 2



7号墳全景（南東から）



7号墳全景（真上から）



(1) 7号墳調査前現況（東から）



(2) 7号墳主体部付近（北から）



(2) 7号墳主体部付近（東から）



SD-01 土層堆積状況

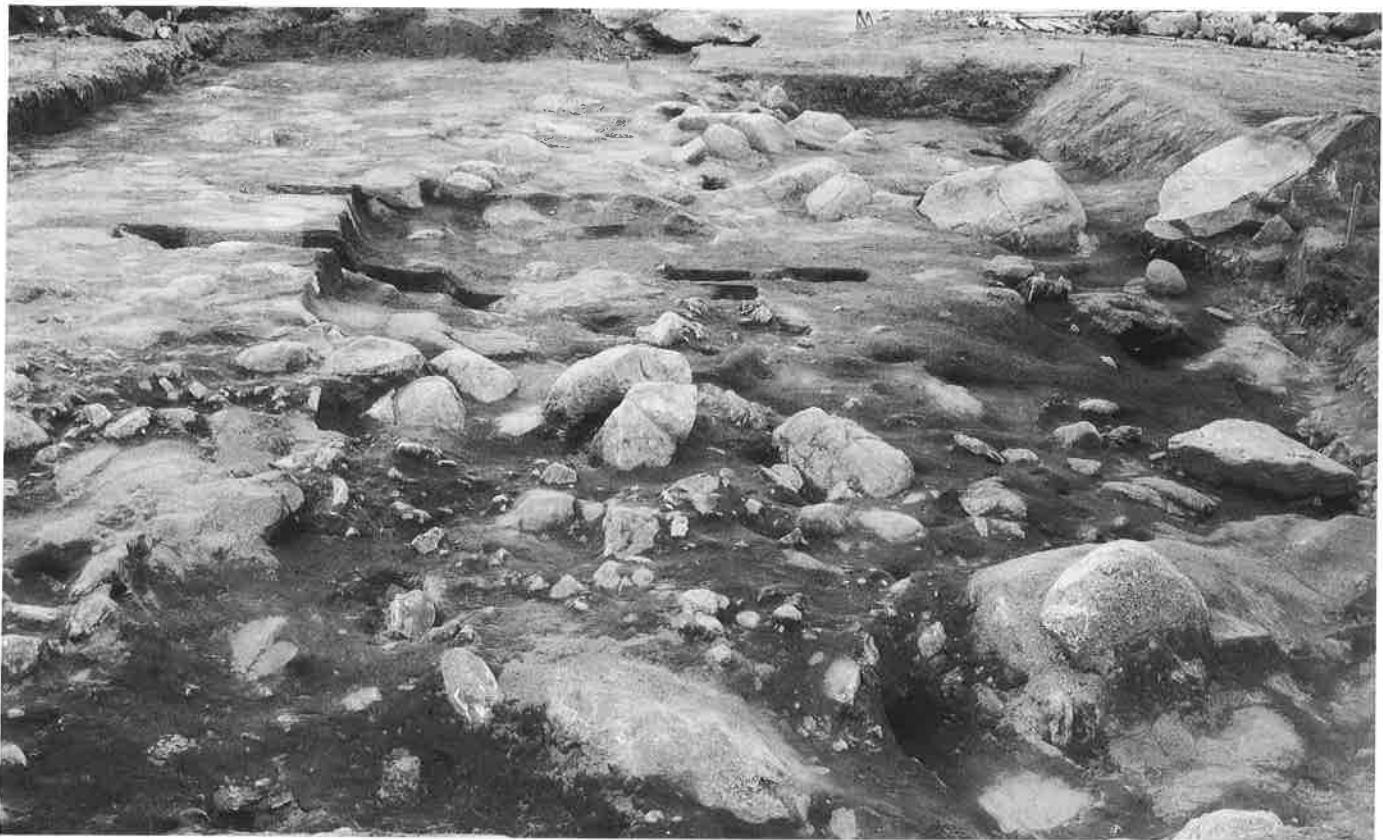


SX-01 土層堆積状況



7号墳遺物出土状況

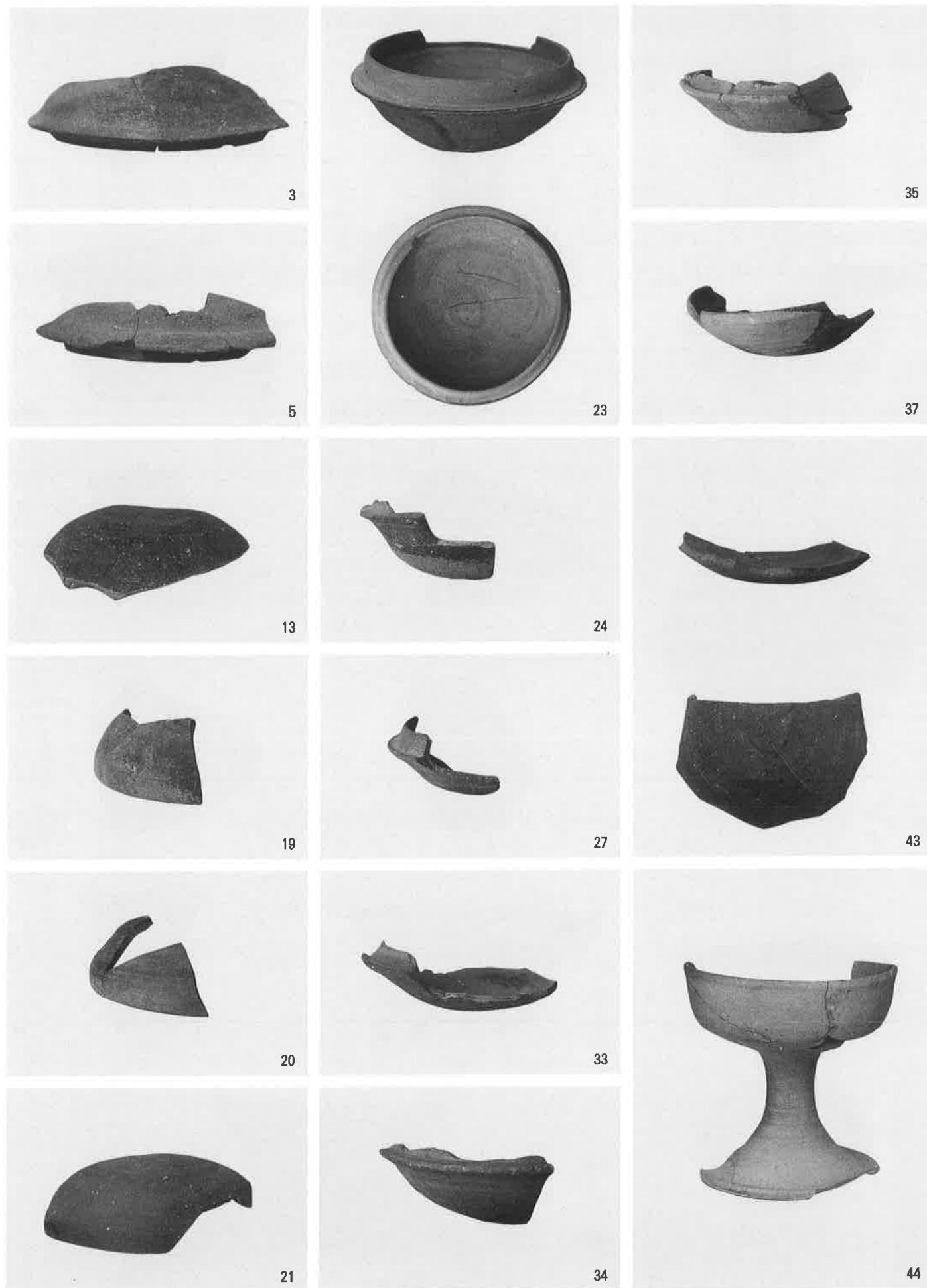
図版 6



7号墳完掘状況（東から）

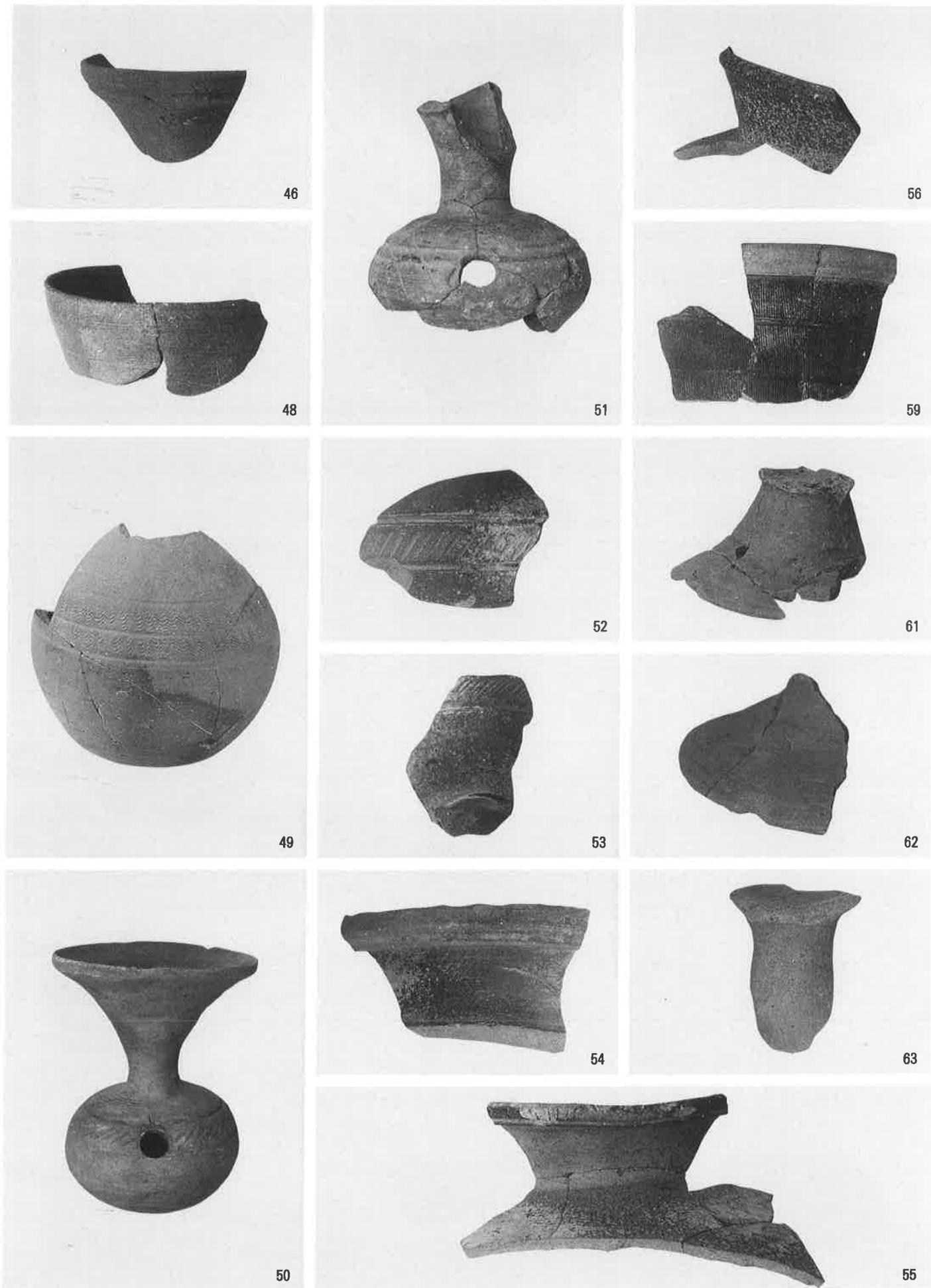


7号墳完掘状況（北から）

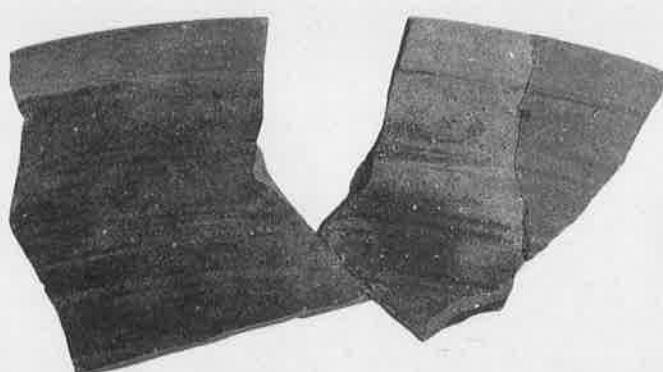


7号墳出土遺物 I

図版 8



7号墳出土遺物 II



58



65



66



60



67



1



2



9



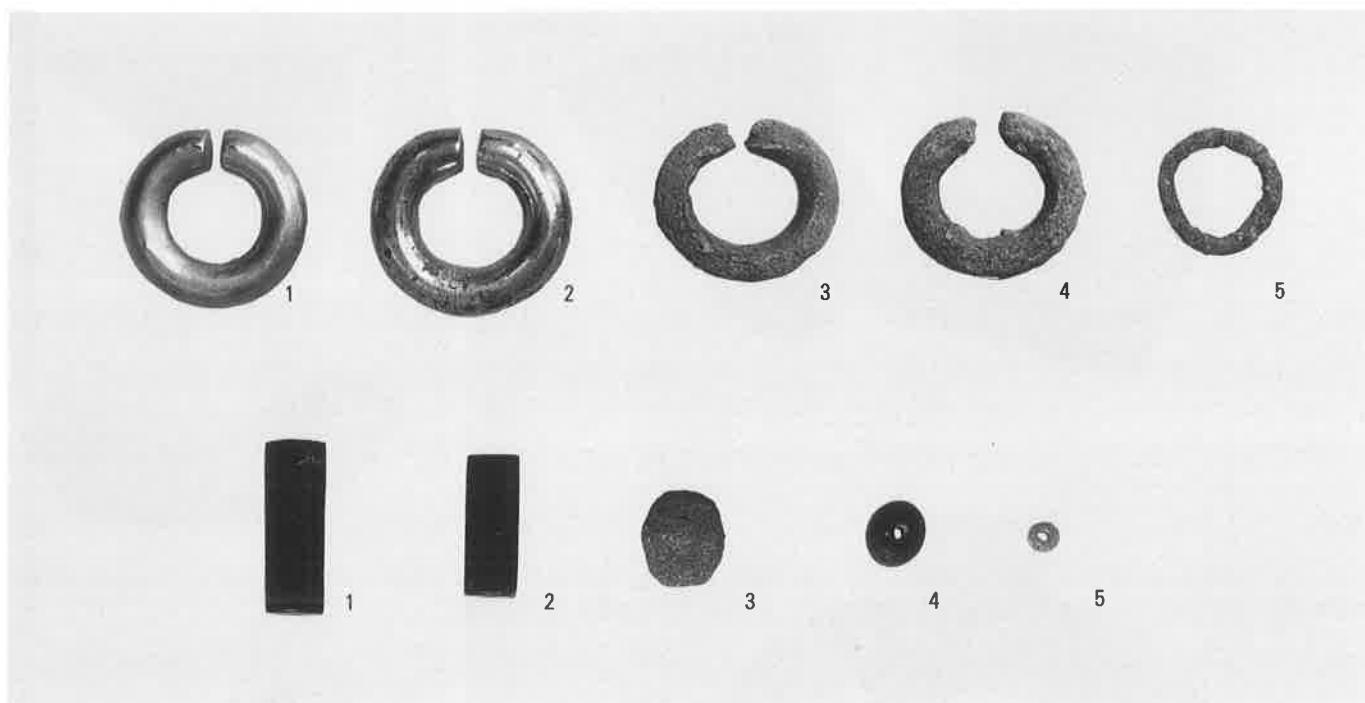
3



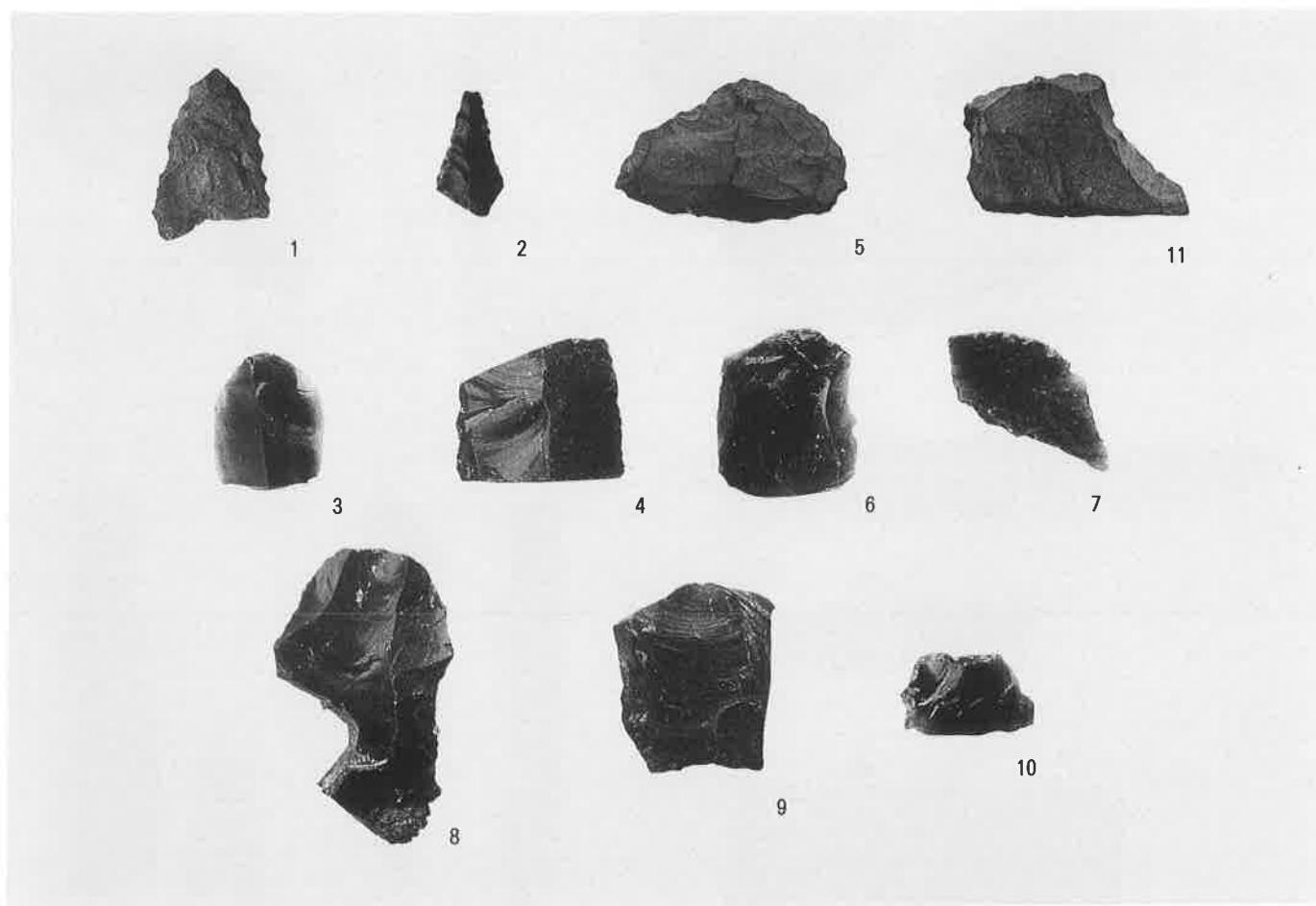
4



10



装身具



石器

報 告 書 抄 錄

フリガナ	ハギノハルコフングン II						
書名	萩の原古墳群 II						
副書名	福岡県糸島郡二丈町大字深江所在遺跡の調査						
卷次	II						
シリーズ名	二丈町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第17集						
編著者名	津國 豊						
編集機関	二丈町教育委員会						
所在地	福岡県糸島郡二丈町大字深江1071						
発行年月日	西暦 1997年3月31日						
フリガナ 所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
萩の原古墳群	福岡県糸島郡 二丈町大字深 江字萩の原	40544 市町村 遺跡番号	33° 30' 20''	130° 8' 00''	19951028 19960107	240	町道淀川西線 舗装工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項		
萩の原古墳群	古墳	古墳時代 後期	古墳1基	須恵器・土師器・装身具 (耳環・玉類)・鉄器	中空耳環出土		

萩の原古墳群 II

二丈町文化財調査報告書 第17集

1997年3月31日

発行 二丈町教育委員会

福岡県糸島郡二丈町大字深江1071番地

印刷 松古堂印刷株









